

多福寺五之卷

伊吹廼屋先生講本

人門

下總國	宇井包教
尾張國	川村篤行
伊豫國	富永友昌

校



○次小尾張國の方小向ひ。右比如く拜み奉呈て。

〔十〕 劔太刀尾張國愛智郡熱田宮爾鎮座坐須大神等乃御前
乎。慎美敬比畏美畏美毛遙仁拜美奉留。

劔太刀は。万葉亦多うる發語小て身了副ひ。腰小取佩き磨

し心成形ぞ云ゆ小冠しれぞ。今始免て此國の發語よ用ひ

を。尾張と言ふよ由ある語あるを。其を伊邪那岐

大神の御刀の御靈は名を伊都之尾羽張神と申れを。古事記傳小。それ名義を解きて。伊都を綾威と云。或人の説小。尾は鋒を云ふ。劔を諸刃ふて。鋒の方張るる物なる故。尾羽張を云ぬ。國名の尾張も。熱田は神劔より出て。此意ありと云ふ。此説はも有る。鋒を尾と云ふ。未。例を見ざれど。劔字云ふ。尾は雄ふて。雄いしを云ふも有る。伊都之男。建。あど云。言の連。羽を刃に意ある。今。世は波婆理と云ふ。針と云。意の針と云。意の名あり。此と同じ。ま。物の満はひこる事を。は。ると云も意近し。を言れしは。動。は。説。故。是。小。從。劔。太。刀。尾。張。と。連。む。小。子。細。あ。き。事。お。れ。む。用。ひ。と。劔。の。尾。鋒。は。張。る。

義小も係る。劔太刀雄いし。義小も係る。但し。古。例。形。き。長。語。を。用。ふ。小。於。き。て。用。意。ま。べ。き。こ。と。許。多。あ。り。其。を。言。長。り。れ。ば。此。に。説。が。と。し。初。学。は。徒。あ。せ。此。を。学。び。て。説。小。例。あ。り。古。語。の。連。き。を。深。く。も。尋。ね。ま。能。く。も。叶。を。げ。る。用。ひ。を。解。ふ。が。多。り。れ。を。あ。り。て。此。御。社。は。古。也。神。名。式。小。尾。張。國。愛。智。郡。小。熱。田。神。社。名。神。大。を。載。ら。れ。て。幾。座。と。は。無。れ。也。釋。日。本。紀。小。日本。武。尊。留。其。形。影。天。叢。雲。劔。爲。此。神。體。今。正。殿。二。字。相。並。東。西。東。殿。曰。土。用。御。殿。奉。安。草。薙。劔。也。西。殿。曰。正。御。殿。配。享。五。神。日本。武。尊。中。座。也。と。見。え。社。傳。小。そ。れ。四。神。乎。西。は。天。照。大。御。神。素。盞。鳴。尊。を。一。座。や。し。東。は。宮。簀。姫。命。建。稻。種。命。を。一。座。空。に。と。言。へ。了。實。然。る。也。小。田。姫。命。と。有。れ。ど。此。は。奇。稻。田。姫。

命を類たり。此は社傳小。天照。今詞小。藝田宮爾鎮座坐須
大御神と有るぞ正しうるべき。大神等と白せ依を是故多。抑おれ御社に坐に。草薙、劔と
申は御刀に現はれある事は。須佐之男命かの御荒び小依
了て。高天原を逐たれて。外國くを見巡り坐し。出雲國に還
り給ひ。奇稻田姫を喚むと云く。八僕の大蛇を斬給ひし時
小。それ中尾小是。劔の有しを。神物を它所思食して。齋き藏
給へ依を始有る。此を解し思ひらく。凡そ蛇の類は。其尾
る有り。然れむ此大蛇の尾は有し。御劔も然る物有るが。其
大蛇の殊にいみじき故。其針大きく。自於ら神物。其
鐵もて造る依神の御太刀と。同じ趣小物。断ちし故。小使
そを劔にあり給へる。小や斯て。今も蛇の類は。尾小針字持
とるも有るは。此大蛇は。當昔の由緒。御佩を賜はれる。佐比
る物の有らむ。其を穂く出見。命に御佩を賜はれる。佐比

持神と号りし。鱈の因縁小なる事と見。鱈鮫あどの類
小も。尾に針を持とるが有り。近くも赤鯨と云ふ魚も。その
類魚あるが。尾は毒有り。針持あるは。准へて思ふ。是し。眞
の劔に其尾在べくも非ず。それを鐵は蛇の甚き毒ある小。
蛇まじ鐵はいふき毒有りて。蛇を斬る刀を。それ斬る依刀
よ。腐る物あり。和漢に蛇を斬る刀あり。とて珍重する
も。蛇を斬て。小事も。丸由。稱るや。有むと思ふ。り
し。其尾は固有せる。骨の類あらむと思へる。非あり
御言は依てぞ知られらる。は。後小須佐之男命。か。此。豫
美都國に入。坐むと。身依期小。その孫子天葺根命を。高天原
小遣して。其御刀を天照大御神に獻り給ひし。うば。大御神
其を御覽じて。此は我が劔あり。吾が岩屋小屏。アし時小。近
江に伊布伎山小落し。劔の如しと詔有り。然れむ此御劔は。
大御神の御あるを。落し給へし。うば。此大蛇が得て其尾

小竊し持する小ぞ有る。此の大御神の御言に依りて。此須佐之男命を御疑ひまして。武き装し給ふ所。御言に依りて。志ばり給へか。有依。其御劍。小や。根命の作する。石屋戸。な。さ。して。幽居せる時。天目。一。根命の作する。石を思ふ。由。何。其。古史傳。小。委。しく。註せる。見べし。何れ。小。ても。大御神の。我。が。劍。あり。と。詔。然る。小。此。遠。呂。智。ま。く。尋。ず。る。御言。小。違ふ。こと。と。無。き。形。也。常。此。大。蛇。小。非。也。そ。此。伊。布。伎。山。小。住。める。多。く。美。比。古。命。亦。名。は。夷。服。岳。神。と。云。ふ。荒。ぬ。る。神。の。化。を。依。り。て。出。雲。國。まで。住。み。通。り。て。人。を。も。取。り。喫。へ。る。也。り。也。然。る。を。其。説。いと。長。く。大。意。ふ。小。さ。く。小。説。盡。ん。な。く。も。非。ざ。れ。む。言。は。文。其。帝。紀。不。舉。る。古。考。傳。と。他。の。古。書。と。も。参。考。して。古。史。傳。小。委。しく。註。せる。を。見。て。知。べ。し。は。大。御。神。の。御。許。小。歸。り。て。後。小。いと。嚴。重。小。齋。を。藏。ち。給。り。

其帝
王攝年

こと聞ゆるを。皇孫通く藝命を天位小即奉り給ひて。天降し給ふ時小。御自れ大御靈を憑給へる。彼、八咫鏡と二種を具予て。無窮小天下志ぬし食れ。御靈と志てを賜ひり依。天命の天下志ろし食れ。御靈の御靈也。此、二種小。御鏡之珠を加予て。三種小。神器と申さるれと。野。不。は。鏡。劍。の。二。種。ある。こと。記。傳。小。論。を。れ。る。如。形。る。が。予。の。古。史。傳。小。委。く。辨。へ。る。を。見。べ。し。加。く。て。其。二。種。小。神。器。は。崇。神。天。皇。小。御。世。まで。天。皇。の。御。同。殿。小。齋。祀。給。へ。り。し。を。其。御。世。小。か。の。八。咫。鏡。を。造。ら。志。く。石。凝。度。賣。命。ま。の。名。天。香。山。命。小。裔。と。天。目。一。根。命。の。孫。と。小。仰。せ。て。二。種。小。神。器。小。御。摸。し。を。作。し。め。て。其。を。内。裡。小。齋。祀。給。ひ。石。凝。度。賣。命。の。名。を。日。本。紀。小。石。凝。姥。命。と。書。れ。る。姥。字。小。より。て。女。神。と。思。ふ。を。甚。き。誤。あり。實。了。は。男。神。小。て。天。香。山。命。と。同。神。小。て。尾。張。國。造。の。遠。

祖あるあと古史傳ふ。かれ元の大御神の御靈は御鏡と。天
奉しく説くをを見よ。かれ元の大御神の御靈は御鏡と。天
叢雲は御劍は禁中を出し奉りて。次は御代垂仁天皇の
二十二年と云し年小。伊勢は五十鈴宮小鎮座あり奉られ
し。おを。第四詞ふて具し説く。が如し。斯てそれ次の御代。
景行天皇の御時。御子倭建命を。まは西國小遣して。荒ぶ
依熊襲建兄弟を始。伏はぬ人ども。荒振神ども。茂悉く征
伐しめ給ひ。序よ云む。此命の御名を。ヤマトタケと訓む。お
かの熊襲建が殺されむ。おを。時小。西方は吾を建まを
大倭国。吾小。益て。建男を。坐け。是を以て御名を。献ら
む。今より後。倭建命と。稱し給へ。と。白せる。故。其時よ
て御名を。稱へ。倭建命を。謂は。と古事記。見。て。西と東
小。對へ。奉り。て。稱す。白せる。御名ある。が。熊襲建。は。建。を。日本
紀。に。タケル。と。訓注。せる。ふ。て。此命の御名。は。用ひ。し。建。字。武



字とも小。タケルと訓へ。き事を知べし。還坐して。間も。なく。
お。傳。信。友。が。云。へ。る。実。然。る。説。あり。かし。還坐して。間も。なく。
東方十二道の荒振神ども。服も。ぎ。依人等をも。言向和せと
詔ひて。衆く。は。軍勢を。も。賜は。ま。任し給ひ。く。ば。倭建命を
は。役。小。罷。行。ま。時。小。伊。勢。大。御。神。の。宮。小。參。り。拜。み。給。ひ。て。其
御。姑。倭。比。賣。命。は。天。皇。命。を。吾。城。早。く。死。ね。と。所。思。は。り。や。西
國を。言。向。て。返。り。參。れ。る。お。を。幾。時。も。何。死。に。軍。衆。を。も。賜。は
は。て。東。方。十。二。道。は。不。伏。人。等。を。平。小。遣。ま。ら。む。此。小。因。て。思
ふ。ば。吾。を。早。く。死。ね。と。所。思。は。る。と。白。し。て。患。ひ。泣。け。り
罷。り。坐。む。と。し。給。ふ。倭。比。賣。命。を。第。四。詞。の。下。小。説。く。如。く。
小。坐。り。故。は。倭。建。命。を。御。叔。母。小。坐。あり。此。比。賣。命。を。大。御。神。を。伊。勢。小。斎。ひ。始。め。給。へ。り。是。時。小。倭。比

賣命。加比蓑雲、劔小一於の囊を扱りて。倭建命も賜ひて。も
し急事あらば。茲囊れ口を解給へと誨言給ふ。倭建命御
力を得まして。其より尾張國小到まし。其國造建稻種命の
家小入給ひて。其妹宮篁比賣命をわねの小御覽して御合
はし。數日留置て。まゝ還上居む時。と期定あり。古事
記。此時。は御合はさて。還上らむ時。は婚まさむと期て。
出給へり。と有れど。後。宮篁姫命の哥。君待て。小月立
より。詠を思ふ。ふも。既。御合坐より。は。聞ゆまむ。
今。熱田。縁起。よ。ゆ。りて。建稻種命。を。加の鏡作。遠祖。伊
斯。許。理。度。賣。命。ま。り。各。建稻種命。は。汝。は。見。道。よ。め。向。予。我
を。天。香山。命。の。末。あり。は。海道。よ。め。就。て。坂。東。れ。國。ふ。て。會。は。む。を。約。て。相。摸。國。小
到。給。ふ。時。よ。其。國。の。賊。帥。と。も。詐。と。從。ひ。奉。り。此。野。よ。大。沼

あり。其。沼。小。住。え。る。神。い。せ。荒。ぶ。依。神。あり。と。白。凡。倭。建。命。を
扱。取。ら。む。と。所。思。して。其。野。小。入。給。ふ。小。賊。等。そ。の。野。れ。四。方
小。火。を。放。と。愛。小。加。の。御。佩。せ。る。蓑。雲。劔。お。れ。於。り。抽。出
て。王。れ。傍。あ。る。草。を。薙。攘。ひ。き。故。賊。等。は。欺。り。れ。故。と。知。看。し
て。倭。比。賣。命。の。賜。へ。る。囊。口。を。解。け。て。見。給。予。は。其。中。小。火
打。り。て。愛。小。火。を。う。ち。出。して。向。火。著。て。燒。退。け。て。還。出。ま
し。そ。れ。賊。等。成。み。ぬ。切。滅。し。給。ふ。其。地。な。は。今。小。燒。津。と。云。り
也。是。時。よ。是。彼。御。劔。の。名。を。改。め。て。草。薙。太。刀。と。號。け。給。へ。也
此。燒。津。と。云。ひ。し。所。な。今。を。益。頭。と。い。ひ。て。即。駿。河。國。の。郡。に
あり。草。薙。神。社。と。て。式。内。れ。御。社。も。在。り。日。本。紀。及。び。熱。田。縁
起。形。等。に。其。野。を。駿。河。國。と。い。は。る。は。後。よ。其。國。は。屬。せ。る。依
れ。る。文。あり。儲。上。よ。云。べ。き。を。後。れ。と。也。此。御。劔。の。舊。名。を。薙

天津麻羅とは。天目一根命也亦名めて。おは鍛冶の遠祖也
ゆぐ。此神也伊斯許理度賣命と二神もて。かれ神鏡を鍛
造れる由あり。天目一根命の亦名を天御蔭命とも天照
津日子根命の御子小坐し。石凝度賣命也亦名を天香山命
と申して。天照大御神の御孫。天照国照彦火明命也御子
坐せむ。おぼろけ。天堅石を取れと有るは。即その質石材料
なり。然れむ古語拾遺小鑄とあゆみ泥むまき非也。あや
小鑄字は。古く鑄兵なども見えて。鍛ふる事おも用ひたり。
質石と云。謂ゆる。此神鏡をもて。大御神字。天石屋よめ
金床の古名あり。ゆて此神鏡をもて。神代紀小。是時以鏡入其石窟者。
謀て出し奉れる時の事を。觸戸小瑕其瑕於今猶存と見ゆれむ。伊勢大宮小鎮座也

し奉られし時。これ御缺をも付て。納め給へる事と知る
也。この御缺小瑕の事也。天德御記云。あほ動きあはれ
倭比賣命也倭建命小。御劔付て賜予依火打也。これ御缺
ありと申れ由也。後の物あから源平盛衰記小。三種靈劔事
也いふ條也。此御難也事を記して。倭姫命の劔に於りて賜
予依彼燧と申れ也。天照大神我が御額を末也帝まで見せ
奉らむ也。御鏡小移させ給ひりる小。取落して破くるを。
燧小形し給へ也。其燧を錦袋小入れて。劔に付られし也。
今世まで人れ腰刀小。錦の赤革を下けて。燧袋と云。こは。
是故ありと有也。参考熱田縁起小引りる鎮座紀小も。後号
此燧天火徽俗号燧袋副大小刀其縁也と

見え。御鏡の損はれし由を云、伝説こそ訛あれ其燧をし
も御鏡は缺あてや云、伝も正し。凡古傳は遺せるふぞ有れ
伝。是ふて挂巻くも畏む神鏡の眞鐵めて御坐すよやを辨
了知也。はし腰刀は守ておたぐ伝火打也。鏡の缺も象て
作伝。履き故實をも辨ふ。然れど此は己が始めて思ふ
せる書も有りや。はて倭比賣命は。それ御缺を御劔おそへ
て賜へる事也。やがて天照大御神の御靈成りて。御守と
なりし賜了伝。義めて。其も大御神は御心あると申しも更
あ也。然れを其昔より。倭比賣命の定め給ひ。為し給ひ。詔へ
る事どもをば。やがて大御神は御言御定めと。今も至
るまで。畏み仕奉ること。おて。實も此。比賣命は。神皇の始
りて。御壽の加ぎ也。大御神の御靈の憑給へるげり。神

神しき事ども多く。御齡ま。斯に如く考へ定めて。後も思へ
し。比類あく長く。御坐り也。延暦は。内宮儀式小。正殿心柱造奉。條。鐵人形四十口。鐵
鏡四十面。鐵銚四十柄と。何也。然る小餘の所も。鐵人形四
十口。鏡四十面。銚四十柄也。あ伝也。一所は。此み精しく載し
て。餘をば。准了知し。むる文。形。後。此御世。は。神寶小奉ら
伝。御鏡の。志。鐵鏡。あ。し。は。神世の。舊。き。例。を。傳。へ。來。れ
る。御式。形。伝。よ。也。知。伝。し。同。し。延。暦。は。式。あ。が。ら。外。宮。儀。式。も
二十柄と。數所。見。え。と。也。此。は。う。ち。任。せ。て。加。祿。と。い。ふ。也。
鐵の事。あ。る。故。語。の。ま。る。金。人。形。あ。や。書。と。る。小。こ。そ。有
れ。是。よ。金。も。て。造。り。る。義。も。非。也。其。延。喜。の。大
神。宮。式。小。も。此。を。鐵。人。形。鏡。銚。各。四。十。枚。と。數。所。も。有。り。て。知
べし。は。て。倭。建。命。相。摸。國。より。上。總。國。小。住。坐。む。と。欲。し。て。

走水ハヤシ此海を渡り給ふ時。高言コトワして。此は小海あり。立タテ跳トり
も渡ワタりてしや。詔ミコトノコトひき。故ユる此海を走水と云ふ。然るも其渡
りし荒ぶ依海神あり。暴風アラキ吹起し。浪を興タて。御船ミナボネを没ヒめ
む。爲ナしうば。其妃橘比賣命。王ミコの白し給はく。是コトう形カタら
海神の心形ココロノカタらむ。吾王アレミコの代カりて。海ウミに入り。あむと白しも竟ハに。
浪ナミを衝ツきて。没ヒ給タりば。浪風ナミカゼ和ナぎ。御船ミナボネ進イみて。岸キに著ツこと
拔得ヒキあり。七日ナナヒの後ノチ。橘比賣命の御櫛ミコ。そ此海邊ウミノヘに寄ヨり
は。其を取トルりて。御墓ミカバを作ツりて。治ツめ給ふ。橘比賣の海ウミに没ヒ給タりて。右
れごと。妃の白し給ふ。王ミコの所聞ソコニ食クひて。管ツ置ツ皮ヒ履ツ。蛇ヘビ置ツ。あ
ぢ各オノオノハ重ヘを波ナミ。上ウり敷クて。其上ウり下シ坐マす。むる時トキ。小妃の哥ウタひ
坐マせる由ユりて。其御哥ミコトノウタも載ノれど。其を吹フり心ココロゆめ事コトれ。此
も益トクしが。と云イふ説セ阿アれむ。今は日本紀ニッポンキと。熱田ネツタ縁起ユキと。を取トルり

て。其説セ古史傳コシデンの。斯カて其著ツキる乃ノへ依所ヨは。上總ウツノ木更津キスラヅ
出るを待マて見ミべし。斯カて其著ツキる乃ノへ依所ヨは。上總ウツノ木更津キスラヅ
也ヤ云イふ處トコロあり。此コトは著ツキ坐マして。橘比賣タチバナヒメを悲カナしみ久キウしく。其海原ウミノヘ
故望コトヲけて去サ給タはざり。故ユる後ノチ。人ヒトあは君ミコ去サらば坐マし所トコロ
と云イふ。地名チナナを成ナり。と國人ウチノヒトは口碑クチヒ傳ツり。於オ此ココ所トコロ小
八幡宮ヤチハタミヤと申マす。舊社キウシヤあり。其祭神ミコトは倭建ヤマト男ヲ命ノミコト。廣幡ヒロハタ八幡ヤチハタ大神オホカミ。
息長足イセナガタラシ姫ヒメ命ノミコト坐マり。と云イふ。此コトは後ノチ。王ミコの古跡コトノシを思オモひて。祭マツル
りる社ヤ。其コトは此ココ海邊ウミノヘ。形カタはち走水ハヤシ此岸ココノキ。依ヨり。近チカく長ナガ
柄テ郡ノ小コ橘タチバナ神社ミヤと云イふ。式内シキナの社ヤあるを。此コトは橘比賣命タチバナヒメノミコトの御櫛ミコ
を納ウケめし處トコロと。慥シカ小語コトバ傳ツふれむ。那ナ也ヤ。相摸サモ。国梅クニウメ沢ノと云イふ
いふが在アりて。其森キノ茂シ吾妻ウメ森ノと云イふ由ユり。あはれど。此コトは時トキの事コト。実マコト
を思オモふ。御櫛ミコを納ウケめし。御墓ミカバを。うあらば。上總ウツノに在アるべし。

おも然れど相摸の梅沢あるも何まれば妃の遺物を納めて御墓を爲りむも亦知べうらま上總國にも猶これより其遺跡多うれはて上總より陸奥國に轉て幸まはし時、船首小大鏡をかけて海路より葦浦小廻り横小玉浦を渡して給ふ時、建稻種命來て會り、其よと蝦夷に境に到て悉言向け。山河は荒ぶ依神等をも平和し給へ。此を日熱田縁起と云依りて云ふ説あるが、おれは依まむ木更津より飛坐して謂ゆる九十九里と云ふ海辺を乗りて陸奥國小入坐るあり葦浦玉浦のやみはて此時小御船は首小大鏡を懸ふと有る小就て思ふ由何。其はかの木更津の濱に連たて天羽郡に金谷村と云ふ所あり此所もうは走水の海岸ゆて上總國と安房國を境なり。相摸國とも僅小三

理むうりの海上を隔とる小村あり。此村に金谷大明神と云ふ小祠あり其神體は圓き鏡に形して真鐵の厚さ四寸五分ばかり徑四尺計あるが、錆られど其面を平ゆて墨を引とる如く、中よと二枚小破く依物あり。祠は後巖窟に作て納め在るを靈異の事ども多しとて土人は鐵尊明神と稱して畏む事なり。古は已むざ其処に至りて見とる趣あり然して百年ほど以前の事と聞ゆり此の海より引上る物ありそはい昔よりきて此海中をりく水面に光を放ち出さ物あるを舟人も怪み恐れて其辺りには乗寄さかたに海人の中は心剛あるが有て光ある所小潜き入て見ゆ小件は物あり在しかた里人と談て合いて引上むとに鎮守神と祀い奉らむと容易く引上られ給へは願ふるに二枚小破れて易くと引上られより鎮守とは願ふ

予る由ヨリ已サレる此形カタを熟ツクく視ミる小見錯ミヤカふレくも無ナき大鏡小
云イハへり。常トク此鏡カガミの如ニく柄エ此有アるコトが。缺失カケウセとシて思オモはる所トコロも
阿ア也。此コトを何ナニふして此海ウミ小在アるコトと惟タシふコト。王ミコ此東征トウセイし給
ふコト。軍衆イクサ此乗ノる船フネはナるコトを數艘アツタ何ナニか。其船フネこト小大鏡
を懸カケる所トコロ中ナカに没シる所トコロも有アるコト。其小懸カケる鏡カガミやと思
はる。其コトを橘比賣タチビ命ミコトの王ミコ代カハりて海ウミ不没イませぬ所トコロを思オモふコト
も。古書等コトの文面フミ小載ヒせるコトは甚ハナく烈ハナしコト。事コトありしコト
所聞トクとシて。上總トウサウ国クニよリて此海ウミよリて御舟ミフネ破ヤれタりト語コト傳ツ
る所トコロも有アるコト。此鏡カガミあらバと爲レては。何物ナニモノとも名ナくはナき
由ヨリ於リし。はナるコト中ナカに小中古コナカ以來イ來キるコト。造ツクるコト出デるコト物モノ小非ヒざ

依ヨる。上古コト此神氣カミあリは盛サカりタりし頃トキ小造ツクれる物モノあリはと疑ウタ
ひ無ナし。あリは就ツても古コの鏡カガミも鐵テツよリて有アるコトと云イハふ。己ミが考カウふコトは誣ウソさル事コトをモ辨ワるコトと云イハふ。倭
建タテ命ミコト陸奥リクオクは夷賊ヒヤクを服ツクす。其コトよリて常陸ヒタチを歴ヘて甲斐國カハ小至キす。
信濃國シノノクニ越ヘ國クニ也ナリも平ヘむコトと。武藏上野ムサシノノを轉ヘ歴レりて碓日坂ウサヒノサカに到キ
りて坐マりて。彼橘比賣タチビ命ミコトを思オモひ給タマふ情シヨロお孫ミコ小斷タテざルとシうば、
其嶺ミネ小登ノボりて立タて。東南トウナンの方カタ望ミまシて。吾孀アツミハト哉ナニと歎ナレき詔ミコトひ
し故ユ。坂東サカノ此諸國シヨクニを吾妻アツミと云イハふ。始ハジはれりて。爰コトよ吉備武
彦命ヨシヒコノミコトを分遣ワケツカハして。越國セツクニを平ヘしめ。信濃國シノノクニの山ヤマ中ナカに小入ノコり坐マりて。
荒アラぶる山ヤマ神カミの王ミコ此苦クめむコト。白鹿シロカ小化カりて御前ミマエに來キりし
を。其眼メ小蒜ヒシさうち付ツて殺コロし給タマふ。此時コトトキは王ミコ道ミチ小迷マひ給タマへ

白狗の來りて嚮導する状あるを其に隨ひて行坐せられ
美濃國より出給ふ是より先には信濃坂を越る者多く神氣
が瘠たるを白鹿を殺し給ひし後を此山は踏らば毒氣を
て人も牛馬も塗れむ能くうら神の毒氣小中らに
も見え然して美濃國小出給ひし時小吉備武彦命越國よ
り參來て遇奉れり斯て尾張國より還て向ひ篠城と云ふ所
に到り給ふ時建稻種命に從者ある久米八腹を云ひし
が馬を策ち馳來て啓けるを建稻種命は海に没みと
其は駿河を度る小海中に鳥あり鳴聲おもあろく毛羽
奇麗し土人古哉覺賀鳥といふ此鳥を捕りて我君小獻ら
む帆を飛して鳥を追ふ風波暴小起て船かよふに
没み侍るとる白しりる倭建命を聞食て悲み泣て現く

哉くをぞ詔ひり詠故それ地を内津と云ふ神名式は春日部郡内津
社あり俗に内津妙見と云へぞ建此覺賀鳥を云ふ鳥はこ
稻種命を祠ると物に見えり此覺賀鳥を云ふ鳥はこ
を倭名鈔小睡鳩を爲されと然るは非也おは鳴聲の加久
我久と聞えし故かく名けし小て實を海に住るいみじ
に悪魅あるがおはし然る珍し其状を示せて誑せしなり
此後小景行天皇に上總小至はせる時にも淡水門を渡り
給ふ時誑らし奉らむと爲て鳴らぬ哉天皇その聲を尋
ねて見給ふり畏まや天皇命は其妖をあし得て八尺
比白蛤を化して在るを取得て高橋氏の遠祖磐鹿六雁
命小膾を作しめて聞食しくよむ此妖物は凶し候あり

此鳥を今の某鳥と探ぬるは總て非あり。此は倭建
 委く云は事長りれむ古史傳に就て見る所し。此は倭建
 命は尾張國小還り來はして先小期に給ひし如く宮篁比
 賣の許に入坐せまは。其宮篁比賣はも御食を獻て御盃を
 捧げて獻る時。それ著るる襲の裙小月水著とり王を
 見行して御合坐むとは思はれ物うら汝の著ある襲は裙
 小月立とれむ御合まし難く思はる由を御歌小遊むしけ
 依り宮篁比賣それ御歌小答りて新玉は年久しく待奉り
 て狂し故小君待の給て月立侍と白しかむ王の歌小
 感はして御合坐と。王の御哥あるは今の外はあり
 此經行の比賣は御合坐せし宛悲しきう此王の狂はるは
 此經行の比賣は御合坐せし宛悲しきう此王の狂はるは

有かくて夜中小廁に入坐むと彼御劍を其邊ある桑
 木小あけて入坐せる。廁を出給ひし時小そ成忘れて寢
 殿に還りまし曉に驚き寤めて更小往て御劍を取むと爲
 給ふ小其木甚く耀めて神の如し然れども憚らば取還
 了て宮篁比賣小木は光れる状を告て給ふ小彼木をも
 怪異きこも無し。劍の光は依らむと答はる。倭建命默
 然してそ寢息り依。草薙劍あり宛畏しや此御劍はしも素
 天照大御神の御あるを彼大蛇が竊み持ちて在る
 建須佐之男命を御得まして神物とおもわして齋き持
 多まひ其崇重し給ふ餘り小大御神は天日嗣の御坐とあり
 小並べて殊小御宝と爲し給へるを天日嗣の御坐とあり
 近く藝命小賜ひしうば天照大御神速須佐之男神の御雲
 此雷まり給ふ事を申すも更なる依り況て大御神は分聖と

坐すかの火打著て在るを常小佩き給ひ於れを凡て極
悪れ事どもは厳しく思ひ給ては得有まじき御事ある
を宮篁比賣の月水あるを憚りて御合はし難くは所思し
於くも其比賣は御答申せる可き思ふに悲き事も
御過りまして御身を汚し給へば彼御氣はも上件の大
御神より此御身の雷まり給ふ故にその月水は穢氣を忌
ひ坐して王の御身を離れむと為給ひしうば王は其御氣
を木よりけて忘れ給へば斯て驚き往まして取らむと為
給ふ時しも御稜威を振ひて然る光輝も放ち給へる事
とぞ想ひ察り奉らる然して宮篁比賣小其由を告給ふ
御氣の光りも御心おき給むと答申す聞食して何ちふ事よ
れりとも御心おき給むと答申す聞食して何ちふ事よ
ましりる其由下の傳承して著明
よ知られり心おしこ心畏しや
ち了後小宮篁比賣命
小我京華に歸らば必汝を迎ふむと詔ひて即かの御氣を
解きて授けて此劍を我が床守せよと詔ふ時よ大伴建
日臣諫免て御氣を此所小勿留め給ひそ然依を前程ある

氣吹山に暴悪神ありと聞くと御氣は非ずは何て其
毒害を除侍らむと白し小高言して縦その暴神ありと
も足字舉て蹴殺してむと詔ひて遂小御氣を留めて上り
給ひぬ此傳尾張国風土記と熱田縁起とに見えて古事
記日本紀とも此事記し洩せり此時を實に
遂小神劍は玉の御身を放れ給ふ爰小氣吹山小至まして茲
ひりる何ぞ悲しき事あらむや
山に神を空手ふて取てむと詔ひて其山に上り坐と記小
山神大蛇に化して道成塞とて倭建命を主神に化れる
大蛇ありては知給む此を荒ぶる山神の使者あらむ既
小主神を取てむ其使者はふり求むと詔ひて其大蛇を
跨えて登り坐し時小山神大氷雨を零し霧こめて跋渉き

給ふこを能く交強ひて行せむ。神は毒氣小中アそ病痺は
し死。此れ主神と有れむ。上小説ふよし多し。美比古命は
島の古縁起は夷服岳神あること論ひ無し。此神の名を竹生
と美濃の塚に在りて西に近江の坂田郡東に美濃に不破
郡あるが兩郡とも伊布伎神社あり。即この山の神あり。此
小も不破郡も伊布伎神社あり。神名式に坂田郡
を加は天照大御神小須佐之男命より神劍を獻じ給ひし
うむ。大御神の御覽して。おれ我が伊吹山に落し給ひし
主神多し。美比古の化れるは。彼八俣大蛇やがて此伊吹山の
されし。うど其神靈うたて益ること無く。如く帰り居て今
まは倭建命小毒をあるし奉れ流あり。是れ依りて思へ。源
平盛衰記なる中。世の書等。膽吹神を八俣大蛇の所変る
こと云へれど。事迹は本末を思へば。實は膽吹神は。大蛇
小化れる形でし事。爰小倭建命。大蛇の毒氣小中アそ。還り
下アはして。山下る流清水を飲みて。御心や。醒坐せむと。

御惱み坐るを。稍起して尾張小還らむと爲て。伊勢小移で
能寝野小到ア坐して。甚く病疲れ給ひて。吉備武彦命を遣
して。天皇よ。東國を言向和しぬる状を奏さしめ給ひ。そは
御病の甚急ある時。小袁登賣能登許能辨爾。和賀淤伎斯都
流岐能多知。曾能多知波夜と御歌は坐して。即崩坐し。此御
年は三十歳とも。三十二歳とも見え。伊布伎山より下
寝野まで到り給ふ間。所くみて有かし事ども多く。まは
悲しむ御哥ども。多うれど。今はみお畧して説く。委く
古事記。日本紀。熱田縁起。及び古事記。此御歌。小袁登賣能
傳。まは己が古史傳あるを見て知べし。此御歌。小袁登賣能
詔。予依る。彼宮篁比賣。汝指して詔。予登許能辨。は床之邊
あり。一首は意を。宮篁比賣は許小。我が床守小せよと置と

了し。劔の太刀をこれ太刀はやせ。彼草薙れ御劔の事を甚く
濃く所念入る。依御歌あり。師語小。御病今く坐あり坐る際
小も。於此御太刀此事をしも忘れ給は交。如此まで濃く
所念入る御心。勇め依御氣のよみ坐さ依布せ。よ此
御子れ御心の永世はで。小此御太刀小留まを坐ほと知
きて。最も最も阿波禮難有き御歌ありかし。武に有ら
殊に恒り此御心を憶いて。臨終の際に至るとも。要しく
ちきあま。儒佛れ意を思ひ。濃く此御哥を憶いて。心らむ
世はで天翔。さても。子孫の勇みを助け。護らむ事を思ふ
な。あまざり。小勿思ひ。熱田社。や言れ。よるは。信。然る言
那から。然れ御劔の事を所念入る依も。御勇みのよみ

坐さ依耳あら。武日臣れ諫め白けまし如く。彼御劔を佩
て幸坐る。死ましうは。荒ふる山神の毒氣。かくは中らざ
死はし物字。後悔ませ依御心も我が置し劔れ太刀。それ
太刀はやと詔す依。波夜て。御辭う。あもりて。哀れも悲し
せも。申れ言れ。便を知らず。身も戦慄る。は。小想像
奉ら依。御語ありかし。然れ。此は御哥と。有れ。直小
哥あり。然るを此御言は。し。御悔み。御言。よて。其や。が。て。眞の
と。い。ひ。傳。へ。と。れ。ぞ。彼。あ。や。み。坐。於。往。坐。る。わ。ど。よ。吾。足。不
得。歩。成。施。之。形。と。詔。ひ。吾。足。如。三。重。劍。と。詔。へ。依。御。語。よ。先
小。橋。比。賣。命。の。事。を。思。わ。し。て。吾。妻。哉。せ。れ。ま。す。御。語。お
少。其。詔。す。御。子。れ。御。心。を。替。な。ま。さ。後。は。其。御。語。の。調。了
因。り。て。御。哥。と。い。ひ。御。語。と。は。云。る。よ。て。実。小。を。吾。妻。哉。と。詔
了。御。語。れ。類。も。云。ま。て。行。々。を。皆。眞。の。御。哥。よ。ぞ。有。り。然
依。意。ち。へ。あ。る。眞。の。哥。を。今。人。も。往。く。了。哥。ひ。出。る。を。其。子。哥

小符合はる哉。大御父天皇は御語小朕察汝為人形則我子
實則神也と詔へ依御言の小縁あらば聞ゆるは憶は合を
れむ信小此王の身實は神にて。須佐之男神の御靈は分て
て生坐る現身形らむとぞ所思は依然ればあそ彼夷服岳
神亦しも大蛇小化して。往昔は恨を報ひ奉りて。然れ
此き事はし唯佛説は論する事やのみ世に未しき學者ら
を思ふ事あれむ。容易小信ひく人もをさく有まじく覺ゆ
れど。神道も本なり。佛説をいと末あり。神道は固より然
事の有るが故に。その事實をぬきみて。佛法は説く者
也。然るは神道字説らむと欲る學者うち其事此根元わが
道あり。佛法を得知らず。まゝ。實に然る事の有る由。浅く
考へ。佛法の妄誕とみ思ひ居るは。譬へて我が先祖の
室を早く盗人。其奪ひて持離く。子孫は徒に其室を見く。そ
生もと先祖は室ありとは得知らば。盗人の罪は如し。然る
瓦石小こそ有らぬや云ひて。目を雷めさらば。如し。然る

人を何は頑愚と云ざらむや。は。是は依りて思ふは。彼夷服岳神の須佐
之男。神小斬られし恨みを。是王小報ひ奉らむ也。其間を伺
予依を。一朝一夕は事小非ざりむを。御身の穢れ給はざ
る間は。皇神とちの御守あり。殊に東征し給予依間を。天照
大御神の御靈は添ゆる。御劔を帯し給ふが故に。災妖を爲
さず能く。月水小御身を汚し坐て。皇神とちの御守あり。
御劔は御身を離れ給予る。汝待伺ひて。災妖を爲し奉れ
る也。總て邪神妖鬼の世にも人をも災妖は。道理のみあ
る。此は予准りて辨へ知る。其趣は。其趣は。其趣は。其趣は。
志く思はむ人。別り著せむ。古今。然れば。熱田縁起も。倭
妖魁考と云ふ書に就て見よとぞ。武尊於氣吹山受病者。所以放神劔於身故也。とは記せり。然

依り古今に學者とて此道理を説示せる人なく。中世
おぬも月水の汚れをば然しも甚くは忌むと聞ゆれ
ど。今よて後れ古學せむ人をもく此故實をよく思ひて。經
行れ婦人小合むこせは更にも云れ其穢をし隨分小忌避
けし事よとぞ。石原正明が辛酉隨筆といふ物に月水を倭
も月のさはりとあるぞ悲しきと詠り佐波利と云はる
てよては重き穢を非ざるおやとて古事記の宮篁比賣
小御合ませる段をいきて重き穢あらむ御酒盞など参り
給むむや泥て御合まらべきや月水の女房常子内裡に祇
候して憚らば禁秘抄御筆條に月障内侍者闕如之時或持
之不可然事也とあり宜しき事小を非せともかりそめよ
も神器の役小從ふ事あるを以て重き穢小を非ざる事よ
知べし。また延喜式に凡官女懷妊者散齋之日已前退出有
月事者祭日之前退出於宿廬不得上殿とあり。然る小當時社
子おるふては濃き穢よあらぬ趣あり。

よりては祿宜祝部の家さらでも神塚に内ある此禁忌
みじく嚴小てタヤヤ云る下屋よおろして其布七
跡の忌七日火を改めて一日十五日は同宿同火せぬ所も
ありと聞く。ちてを半過と云ふ旅小ていと平き事あるべ
し。物清むるは好き事あらは是を餘の事あり有らむと
云ふれや中古の風よとて上古に大義字等閑と思ふ
き小非にまゝ佐波利と云ふを以て軽き穢と思へるも非
あり。其を佐波利といふ語重く取とて最重き事よも取
らむ。殊に此は經水の時よは佐波利に男小逢がと由の
言と聞ゆるおや。古事記の此事を引くるも其故實を
よくも知ざらぬ。ちて倭建命に御靈の白鳥と化して
天小屏坐して有るを暫さる御形を現示し給ふありて
かし。眞にちる物よ。生茂轉じ給へ依り非也。かの大名家
遅小名牟遲神に赤縣州小傳子にせむる玄道に謂ゆる尸解
此道を得給ふるなり。其は御棺を開き見ゆ。御屍を無

しを有るにて知登し。西土小は、彼黃帝玉子を始め、此道茂
きて僊去せ、倭人數ふるに、遑阿らに、其はみ形靈劍を身代
也、志て、永く世を涉、倭神術あるを、此王に昇去はし、自然小
其道小符へ了。最も奇靈小畏は御事あり加し。然れや、此を
は人の知ざる事字し、己が始めて言ふ、説れまむ、今忽ち信
ふ人も有まじく、覺ゆれど、神典此学を精究せざるは、彼
玄道に與義を探り、彼道の我の古道より出づ、倭由成明め、
らむる少くも、已る今云ふ説は、疑ひ無る儘く、覺ゆる哀
き其域まで、悟り至らむ人も、形を尸解と云ふ事の
大要を、赤縣太古傳及び志都能石屋に説くを、見取べし。
偕加は宮簀比賣命は、王に御言のほふく、草薙の御劍を御
床の守と安置し奉る小光彩しく、靈驗いち著く坐て、禱請
を人おや小感應何倭こと響れ音に應むる如く、年久しく

在り、倭小宮簀比賣命年老て、人々を集めて、社を建て、神劍
を遷し奉らむと議りて、其社地字定むる時、小楓木一株あ
り、自然小炎焼して、水田小倒れて、其田久しく熱く了、故
小、そを熱田社とぞ號り、倭（古也）即愛智郡あり、尾張風土記
あく、固より熱田と云ひし、郷名ありし所へ、是より遙後小
社を立よる故、熱田社と云ふや見えしなり。是より遙後小
天智天皇に御世の七年、小新羅國に沙門道行と云ひし者
其の神劍を盗みて、本國より移し奉らむと、伊勢國まで逃去
り、倭に神劍自たうら脱りて、本社小還り給ふ、道行は、盜
みて、攝津國まで到り、難波津より、纜を解きて、國小歸らむ
を欲す、倭小海中、小て度を失ひて、は、難波に漂著せり、道

行恐れて、神劔を抛棄むとほるふ、身を離れ給へば、道行せむ方なく、自から其由致申し出しうは、遂に斬罪に所せらるなり。此道行が盗み取る時、始らず七條の袈裟小に於て逃去り、神劔脱りて還り給へる故に、其後小盗めり時、九條の袈裟小裏みよりし故に、神劔を脱ること能はず、此由を吏民に託宣ありし故に、驚きて尋ね求めりと、熱田縁起に記せ、故に寛平の頃、殊に佛法をやおも無く言ひ難せる時ある故に、さる妄誕を記述へしあり、固より是、後は神劔を朝廷に停め置給ふ所、論ずるに足らば、是、後は神劔を朝廷に停め置給ふ所、次は御代天武天皇に御時、小天皇御病あり、其由をトはし免給ふに、神劔の祟ある所よし、御ト出しうは、熱田社に還し置給ひて、其よを今小至るまで、彼御社に鎮座し奉り、建稻種命の裔ある尾張氏、世々大官司祝部などの職に補

して奉仕する事とはなり、然れど其社傳に、其神劔を、天照大御神、須佐之男神、倭建命、宮簀比賣命、建稻種命を配祭るに云ふは、實然も有べき説ふこそ、是をもて熱田宮爾鎮座坐須皇神等とは申せり、其枝宮枝社に多く坐こは、社傳に舊記に詳なり、凡て此御社の事は、於て倭建命の事、就て云ひ足らぬを、今その社に由来をのみ、師に玉鉾百首、東に國言向りて御劔を、熱田宮に鎮まてい、天平の解に、むむのしの國言向ては、此御劔を以て、倭建命の東に國を平治し給へる事なり、而て東國を征し給ひしは、倭建命には有れども、皆古の御劔に神威の助け給ふ

あまきは。此歌小國こや向て云くや。は。專御劔^{モハラ}方かけて詠^ヨ免る形也。一首はさくろ。三は句を上りめくらして御免る^ミ鎮座し給へ^ミとあり。ぎを東の国くを平治して。らて遂は熟田の宮は

○次小下野國れ方小向ひ。右の如く拜み奉りて。

下毛野國二荒山乃底津石根爾大宮柱太敷立立鎮座坐^{シモツケヌノクニフタラノヤマノソコツツイハネニオホミヤハヒラフトニクタテハ}

須東照大神乃御前乎。慎美敬比畏美畏美毛遙爾拜美奉^{ス。アツテルオホカミノミミヘラツシミヤマヒカコミカレコミモハリカニニカミタチツ}

雷。

此御神の御事迹を記せる書れ古きは。尾張の源敬公れ記させ給へ依。東照宮御年譜あり。といふ物も有り。是まご敬公のもれし給。其後小次に撰める書れ大部あり。武徳

大成記。武徳編年集成。東遷基業。烈祖成蹟。とあり。

部の小

御事迹の見えたる書を。今数ふる。暇あらば。二荒山を鎮座ませる由來も何も。右の書ども。小委し。れを。此に申

是御神れ武田信玄や御合戦の以前。遠江國周知郡。小國神社。祈白し給へ依。御文れ寫し。とて拜見せる。小。其御

文中。小。今當於人皇百有五代。御宇。人心不淳。姦邪竝起。四夷

舉兵革。八荒動干戈。更不聽理。世安民之政矣。吾受生於弓馬

家。願欲興帝都之衰微。治國家之擾亂。救民於塗炭之外。非素

懷歎。故不置心。於一日片時。泰山安。造次於是。顛沛亦之焉。爾

今于茲。武田晴信。起甲州國內。振威於鄰國。犯近里遠境。破却

無勢敢非憑當社之神力爭得勝之乎。仰冀神力速誅戮凶徒於目擊裡矣。故捧一腰之吹毛。今此舉義兵全非所致私用。絶世廢爲興民也。玄鑑莫誤仍願書如件。元龜三壬申稔九月二十二日源〇〇敬白と云。此御文一を毛ても其御基業は御本志は知られる也。穴かしよ。あむ立うす。第二は巻の合せ考ふ。まよ説よりし事どもを毛

○次小當國ソノクニの一宮は方小向ひ。右は古やく拜み奉

某國某郡爾鎮座坐豆國乃一宮止坐須某神社乃御前乎ソノクニソノ郡ニシテ鎮座坐豆國ノ一宮止坐須某神社乃御前乎
慎美敬比畏美畏美毛遙仁拜美奉雷ウレシキミヤヤヒヒカレコミカレコミモハルカニニヤガミタテツル

諸國小一宮二宮あど定られし年時を古書サカに詳し所見し
依事あり。或説了。聖武天皇の御世ミヨ小六十六個國小一社於
於オキ撰置給ふと云。依をちも有む。これ或説を。藤陽盛衰記
説了。崇神天皇の御世は定め給へる。天社を二宮と稱し。其
後垂仁天皇は御時了。定置き給ひし地社字。二宮を稱する
と言へれど。信られぬ説あり。此外は。尾張は眞野時繩と云
説くおわく。今數ふる小暇あらば。尾張は眞野時繩と云
ひし入れ。神階編といふ書よ。或神記小云く。諸國の神社了。
代く小神階を進られて後。一二は宮と云ふ事も有。此を
國分寺あど置きし如く。一時の定免せは見え。一宮記あ
と云ふも其時を繼了記さば。中頃よと申し出せ依事
形也。上代は記録小。一宮と云ふこと無しと言へ。實然る説

形了。そは誠上代の記録に此事き古えを。伯家部類に引
伯耆一宮二宮。周防二宮。長門一宮二宮。淡路一宮二宮。讃岐
一宮等云くと見え。百鍊鈔元仁元年の所。土佐国一宮云
云と有り。金葉集に能因法師が伊豫に三島神を祈雨の哥
を上りし事の詞書に。國に一の宮と有る。あどより
外小古き物に所見。福むある。伊豫に三島神を。一宮云ひ
し事は。いと古き事と聞えて。あや彼此の書に見え。豫陽盛
衰記に。倭国に於て一宮と云ふは。伊豫に
大三島より外小を無きありをも言へ。 ちて其。一宮記
也云ふ物。神階編に。神名に相違多し。盡くは信ずる小足ら
ぬ。と云る如く形と。此を除ては。諸國の一宮を集記せ依
書有。こ也無れを。今は其社名字探り。文は神名式に依て此
小著せ。但し其神名の正し叶ふ所を更あり。聊々心ゆく
協す。漢文小記し。他を扱ひて。神名の知られざるは。本
の説を捨て。己が常の文小記せ。見む人。そ此意を得てよ。

そは畿内小丸。山城國愛宕郡。賀茂別雷神社。亦若雷名神。大
賀茂御祖神社二座。並名神。大月次。相嘗新嘗。大和國城上郡。大神大物主

神社。名神。大月次。相嘗新嘗。河内國河内郡。枚岡神社。名神。大月次。相嘗
天兒屋根命也。和泉國大鳥郡。大鳥神社。名神。大月次。新嘗。一宮記云。攝津

國住吉郡。住吉坐神社四座。並名神。大月次。相嘗新嘗。一宮
後加神功皇。後四座也。ちて東海道小は。伊賀國阿拜郡。取國神社。大。○

記云。号。南宮金山姫命也。○伊水溫故。今一宮村小在て。當
國此一宮あり。少彦名命。金山比賣命。二座あり。縁起に。少彦

名命の神。蘇仙人に如し。相殿に南宮大明
神。金山姫命。形と有るよし。見え。伊勢國河曲郡。都

波岐神社。一宮記云。猿
志摩國答志郡。粟嶋坐。伊射波神社二

座。並大。一宮記云。祭神を記さ。渡會延經。此社の考證

座。並大。一宮記云。祭神を記さ。渡會延經。此社の考證

座。並大。一宮記云。祭神を記さ。渡會延經。此社の考證

尾張國中嶋郡眞墨田神社。名神大。○國人吉見幸和説子。眞

と為る尾張連等が遠祖。天香山命の父神。參河

國寶飯郡砥鹿神社。一宮記云。大己貴命也。○總國遠江國佐

野郡已等乃麻知神社。一宮記云。天兒屋命の御母。許登能麻遲命子

坐。駿河國富士郡淺間神社。名神大。○一宮記云。大山伊豆

國賀茂郡伊豆三島神社。名神大。月次新嘗。○此社の祭神を

と有れど。其を伊豫國三島社ある神の大山祇神あるよ。命

古く誤り來する非説ふて。此を事代主神を祭れ社ある

名神大。○一宮。相摸國高座郡寒川神社。名神大。○一宮。武藏

國足立郡氷川神社。名神大。月次新嘗。○一安房國安房郡安

房坐神社。名神大。月次新嘗。○上總國埴生郡玉前神社。名神

一宮記云。高皇產靈弟生產靈。一男前玉命と云ふは信ら

下總國香取郡香取神社。名神大。月次新嘗。○常陸國鹿嶋郡

鹿嶋神社。名神大。月次新嘗。○一東山道北諸國小は近江國

栗太郡建部神社。名神大。○一宮記云。大己貴命也と有れ

飛彈國大野郡水無神社。一宮記云。大己貴命の女と云ふは非

れど。今位山の麓に在りて。國の一宮。信濃國諏訪郡南方刀

美神社二座。名神大。○一宮記云。大己貴命。二男建御名方

坂刀賣命。上野國甘樂郡貫前神社。一宮記云。經

とまをり。下野國河内

郡。二荒山神社。名神大。○一宮記云。大己貴命男事代主命也。は二荒山小坐し。陸奥國白河郡都古和氣神社。名神大。○一宮記云。高彦根命と有れ也。信がし。渡會延經が考證。一宮記云。乃都古和氣神社是也。云へ。式に此社了並。びて伊波止和氣神社有り。然れ。出羽國飽海郡大物忌神社。む。此は異名同神。子有べき。名神大。○一宮記云。北陸道小は。若狹國遠敷郡若狹比古神社。云。倉稻魂命也。二座。名神大。○一宮記云。上社彦火く出見等下社玉依姫命。越前國敦賀郡氣比神社七座。並名神大。○一宮記云。仲哀天古事記傳。仲哀天皇。加賀國石川郡白山比咩神社。一宮記云。段了就て見るべし。能登國羽咋郡氣多神社。名神大。○一宮記云。輿等上社。能登國羽咋郡氣多神社。名神大。○一宮記云。越中理媛命也。國射水郡氣多神社。一宮記云。越後國蒲原郡伊夜比古神社。名神大。○一宮記云。佐渡國羽茂郡渡津神社。一宮記云。五十種神。天香久山命也。山陰道は。丹波國桑田郡出雲神社。名神大。○一宮記云。大己貴命妻三穗津姫命也。丹後國與謝郡籠神社。名神大。月次新嘗。○一宮記云。但馬國朝來郡粟鹿神社。名神大。○一宮記云。上社彦火く出。因幡國法美郡宇倍神社。名神大。○一宮記云。武内大。伯耆國川村郡倭文神社。一宮記云。大己貴命女下照媛也。と有。出雲國出雲郡杵築大社。名神大。○一宮記云。大己貴命素盞島。石見國安濃郡物部神社。一宮記云。饒速日命。隱岐國智夫郡由良比咩神社。名神大。○一宮記云。大己貴命嫡后須。山陽道は諸國は播磨國宍粟郡伊和坐大名持御魂神社。名神大。美作國苦東郡中。

大。○一宮記云。佐渡國羽茂郡渡津神社。一宮記云。五十種神。天香久山命也。山陰道は。丹波國桑田郡出雲神社。名神大。○一宮記云。大己貴命妻三穗津姫命也。丹後國與謝郡籠神社。名神大。月次新嘗。○一宮記云。但馬國朝來郡粟鹿神社。名神大。○一宮記云。上社彦火く出。因幡國法美郡宇倍神社。名神大。○一宮記云。武内大。伯耆國川村郡倭文神社。一宮記云。大己貴命女下照媛也。と有。出雲國出雲郡杵築大社。名神大。○一宮記云。大己貴命素盞島。石見國安濃郡物部神社。一宮記云。饒速日命。隱岐國智夫郡由良比咩神社。名神大。○一宮記云。大己貴命嫡后須。山陽道は諸國は播磨國宍粟郡伊和坐大名持御魂神社。名神大。美作國苦東郡中。

山神社。名神大。○一宮記小。大己貴命と有れ。美濃國仲山
と云。金山彦神社と同神あるべし。社傳は鏡作命あり
備中國賀夜郡吉備津彦神社。名神大。○一宮記云。備前
安藝國佐伯郡伊都伎嶋神社。名神大。○一宮記云。備前
郡玉祖神社。一宮記云。伊弉諾等男玉屋命。長門國豐浦郡住
吉坐荒御魂神社三座。並名神大。○一宮記云。底
紀伊國名草郡日前神社。名神大。月次。國懸神社。名神大。月次
一宮記云。此二社を考て。天兒屋命孫石凝姥命と有れ。此
二社を天照大御神の神寶比御鏡の鏡に造れ。二社
御鏡了坐あり。其を古史傳云。委く説く事見るべし。殊に石
凝姥命を天兒屋命と云ふこと。餘り亦非説れり。
淡路國津名郡淡路伊佐奈伎神社。名神大。○一宮記云。阿波國
板笠郡大麻比古神社。名神大。○一宮記云。備前國
有れ。決めて天日彥命也。讚岐

國香川郡田村神社。名神大。○一宮記云。備前國
越智郡大山積神社。名神大。○諸本小。加く有土佐國土佐郡
都佐坐神社。大。○一宮記云。高賀茂西海道小は筑前國耶
珂郡八幡大菩薩宮崎宮。名神大。○一宮記云。八幡大神。二聖
此宮の事を考あり。筑後國三井郡高良玉垂命神社。名
古史傳云。註ふを見べし。
大。○一宮記云。豐前國宇佐郡八幡大菩薩宇佐宮。名神大。○
武内宿禰也。豐後國大分郡西寒多神社。大。○一宮記云。豊
神大帶姫也。豐後國大分郡西寒多神社。大。○一宮記云。豊
也。又名。肥前國佐嘉郡與止日女神社。一宮記云。豊前國
原八幡也。肥前國佐嘉郡與止日女神社。一宮記云。豊前國
皇后妹也。何り。伯は肥後國阿蘇郡健甕龍命神社。名神大。
叔了作。遠くこそ。日向國兒湯郡都農神社。一宮記云。大
記云。景行帝御宇日向國兒湯郡都農神社。一宮記云。大
出現。阿曾都也。日向國兒湯郡都農神社。一宮記云。大

國桑原郡鹿兒嶋神社。大○一宮記。号大隅正八幡宮。兼右

薩摩國穎娃郡枚聞神社。一宮記。和多都美神社と出して

註せる甚しき非説あり。和多都美神をいうで猿田彦神と

と云む。塩土老翁いうで猿田彦神をいうで猿田彦神

火く出見等ありと云よ。壹岐國石田郡。天手長男神。名神

し。延經が考證云。一宮記。天思兼神。一男と註せぬ。曰く天手力男命を思

兼命の子と云ふ俗説あるを其名の似たる故。去いて手

力男命を定めたる説あり。信るは足らぬ。對馬國上縣郡。和多都美神社。名神。大○一宮

記。八幡宮也とある。かくて其一宮記の末小。右諸國一宮

神社如此。秘中之深秘也。有_レ然れども此等此大空は世

人の弘く聞知しめて。一人も多く真此道小入_レる_レ教_レ育_レ立

法きと先師此遺訓あまは其意を失_レは_レ右の如くは説

著せる形也。先師の訓も玉勝間ふらみれ。卷子。已とて分

己た道の事も哥此事も縣居大人の教子の趣知小依て

あ_レ古書と毛を考へ覺れる耳こそ有れ。人子取_レわ_レて殊

小傳ふべ_レ節もあ_レし。凡て好事をい_レる_レ小もく世_レ弘_レく世

ま_レ布_レしく思へば古の書どもを考_レて。知り得_レりと思_レ小

限_レて_レみ_レあ_レ書_レの_レ如_レ著_レは_レして。露も殘_レし。留_レる_レ事_レも無_レぞ

を_レし_レと書_レれ_レま_レ人_レ小_レ贈_レら_レれ_レし_レ消_レ息_レ。一人_レ小_レあ_レも_レ多_レく道

を説聞_レう_レ世_レ候_レが_レ本_レ意_レ。候_レへ_レむ_レ門_レ弟_レあ_レら_レば_レ也_レ。野_レ生_レ小_レ於

て_レ秘_レし_レ申_レ候_レ更_レく_レ無_レ座_レ候_レ夫_レ故_レを_レと_レひ_レ門_レ人_レ子_レ涉_レ成_レ亦

され候_レても_レ一_レ毛_レ涉_レ傳_レ授_レ申_レ候_レ也_レ無_レ座_レ候_レとも_レ言_レれ_レり_レ

申に所あり。於ち一宮二宮は餘り國小よきては。三宮。四宮。五宮。於と稱す。亦も有る。は。郡くふ水死て。一宮二宮と稱す。亦國も有り。既云ふ如く。一宮と云はら。上代小を聞え。然稱ふ。況て其以下は後世に定免る。亦勿論あり。然れども。凡てかく自然の如く定まれる。神社あるは。事は上代了然しも。故實あり。後世人のふと始免とて。事小ても。終小嚴重ある。定法比。如く。於て。其や。て。神の御心小叶ひ。或は諺。天を言は。人をも。言し。むと云ふ。神を物言。顯世人。爲し。免言し。めて。其儘小用ひ。給ふ事を有れば。此等の事どもは。彼。汚き。佛法。を。証。行。め。

とは異あり。然は古書小所見。於て。鹿略小思ふ。於き。事小非。加し。此。事のみ。あら。故。実。於て。始。ま。れる。事。と。覺。ゆる。事。の。神。の。御。心。を。叶。り。と。見。ゆ。は。事。多。う。る。中。小。も。神。の。位。階。を。進。む。事。を。實。行。は。有。ま。じ。き。事。を。覺。ゆ。に。聖。武。天。皇。の。御。世。に。八。幡。大。神。を。其。姫。神。小。品。を。勸。め。給。へ。る。事。起。り。て。次。に。其。事。を。成。も。て。來。り。後。に。諸。國。の。神。社。を。何。ぞ。と。云。へ。む。位。階。を。進。ら。ぬ。事。と。成。し。て。凡。人。の。心。を。も。て。何。ぞ。や。と。思。は。る。を。神。の。御。心。小。は。叶。へ。と。思。え。て。淳。和。天。皇。の。御。世。に。伊。豆。國。に。坐。す。阿。波。神。の。我。小。品。位。を。賜。は。り。て。甚。く。神。異。を。示。し。給。へ。る。事。に。有。り。し。を。思。ふ。べ。し。實。も。測。り。難。き。神。の。御。心。あり。也。其。は。一。宮。二。宮。の。事。は。神。社。に。位。階。の。事。あり。也。後。世。小。人。に。始。免。る。事。小。は。有。り。也。此。は。善。神。と。ち。の。御。心。を。有。り。む。神。の。嫌。ひ。給。ふ。事。を。聞。え。ば。同。じ。く。後。世。小。人。に。始。免。る。事。あり。也。佛。法。風。に。事。ども。は。天。照。大。御。神。に。惡。し。給。

ふ事。何るも聞ゆるは。妖神の心や人誣する態あり所
知る。大御神の佛法を悪し給ふ事ども。證を初巻に講
諸神も嫌ふべき事いふも更あり。そは月輪振政兼実公
の玉葉了。建久四年正月。十二社奉幣の宣命を大内記宗
業といふ人。小書しめ給へる。其草案。神道佛界といふ
語。此有るを兼実公難め給ふ。於伊勢者。素可改之。他社
宣命。無憚之由所存也。と申さう。此申状。太無。我朝之習
以伊勢事為本。爭以他社之狀。載草奏哉。と言ひて。甚く叱り
給へる事の見え。はて彼一宮記を載する諸社の中。小
は。必それ一宮を誤れ。亦も有る。思ふ由あり。其を神風和
記といふ物了。尾張の一宮は。中嶋郡大神神社ありと記せ
るは。謬り。一宮記。小真清田神社と有る。正しく聞か
る。遠江國。此一宮を。已等乃麻知神社と有るは。謬り。ふや

其は式小。周知郡。小國神社と有る社。今も一宮。郷一宮。村
小在。一宮と稱せられ。是は准へて。思ふは。餘
の有まじき。非ざれ。其國。一宮。も然る。相違
れ人。よく辨ふべき事あり。儲ま。諸國。一宮の外。小
國魂社と云ふ。何。總社といふ。何。國魂社。此事は。師説了
何神。小まれ。國を經營。坐し。功德あるを。其國。小。國魂と
も。大國魂とも申して。拜記る。外。故諸國。小。某。大國御王。神
社と云ふ。多し。言れ。多。如し。其諸國の國魂。神。神
諸國。載し。漏せるも有べく。ま。中。大國主。神
の荒魂と坐し。大國魂。神を祭れる社も有ぬべし。は。總
社。稱。社。此事は。多くをむ。し。國府の有し。地。何。已
て。式内。某。神社と有る社も。多。亦。外。只

總社と稱す家も多う也。此を按ふ。往昔國々小國司を置
給予てし時小。其始免て入府せる時を國守の神拜とて其
國ある諸社を盡く巡拜し。ゆゑ然らぬ時くも。巡拜す家式
ありてしうば。其社く一社了總記ひて。總社と稱せるが。新
小社を建てるも多うれと。中ナカ小は其國府の地ある。一宮社
了配せ齋戸迄有てし故。只了總社といふ也。式内ふて
某神社と云ふ社を。總社と稱するも多しを聞えと。谷川
此和訓葉。或曰古者國府必建總社。有事于国内官社。則國
司率僚屬先修典祀於此。其儀如京師神祇官。とあるは。既く
黒川道祐。松岡玄達等が著書に云ふ説。其本拠は詳ふ
ら糸と信ふ。此の如き事ありりむと所思ゆる。好り。貞時
繩が神階編に。總社と号する小國よりて異なる。此事あり
ま於當國を以て謂ふ。本朝文粹に。大江。巨衡説。熱田を

當國總社也と云ふ。小神社考に梅華無尽藏を引て。中島郡
府中國魂大明神者國之總社也と云ひ。今も其社よては總
社と稱す。まゝ總社を以て。一宮や申例を云ふ。播磨國
飾磨郡姫路の城中ある伊和大明神。一宮あり。小神社啓
蒙。是を總社と記せり。あゝ二十二社本縁は山城。國賀
茂。社名當國總社。仁天坐須と云へり。此は當國の一宮ある
小總社と稱せり。後世此別ち分辨し難き事。ちて上。件一宮
ありと云ふ。右の由緒を考ふるあり。ちて上。件一宮
や。あゝ申。大神等。此事小おきて。顯明小知られ。依幽
冥事也。物小見當する條を。一二於記し出む。杵築大社
記了。帥中納言家保卿。日記といふ物。城引きて。天仁三年七
月四日小。大木百本。海上よて。稻佐浦。小流を寄れ。あゝ小
因幡の上宮に近邊了。長十五丈。口一丈五尺。大木一本よ
て來依。在地の人民疑ひを爲あがら。是を伐取むと。好小。

大蛇クサ件タテ此木を纏マツひて居イる故ユ。諸人恐オソれて退ヒき然シカる
小伐キリト取トむと計カてし者モノども、病ヤ苦ク小惱オモさシ候ケ事コト頻ヒりシれ
は種タネくク祈イりシ候ケ。御託ミタケ宣イふ云ク。出雲イセノ大社オホヤシロ造立ツクリ此毎タビ
度タビ。諸國シヨククニの神カミとシて行事コトノとシ候ケ。今度イマタビは我ワが行事コトノ小當オホシてぬ。
御杖ミタケ木キを採進トリタマフり畢マツてぬ。件タテの木キ一本イツポンを我ワの得ウケ分マあり。此木
を以モて急イソぎ我ワが社ヤシロを造立ツクリにシて示メし給タマふ。稻佐イナサ浦ウラの寄ヨリ
木キ少オホて正殿マサドム此營ヤシロ作ツクリせり。永久エウキウ三年十月廿六日遷宮ウツリヤシロ是コト
旅寄ツリヨリ木キの造營ツクリヤシロと云フ也ナリ。此コト是コトより後ノチ。康治二年三月
十九日イナサ小左辨官オホサダノより大社オホヤシロの
神人カミヒト下シりシ宣旨ノリノミ。その寄木ヨリノキ此造營ツクリヤシロの事コトを載ノりて
帥シ中納言ナカノリノミ家保イサノ任タ造營ツクリヤシロ之ノ間マ有アり神カミ之ノ告ツケ。大木オホノキ百本ヒャクポン自ミ海上ウミノ寄ヨリ社
邊ヘ以モ其ノ大木オホノキ等ナド用ヒて梁ムササビ棟ムササビ柱ムササビ桁ムササビ更ナ不レ採レ。柱ムササビ梁ムササビ之ノ枝エ木キ云フ。因幡イツハチ此
と有アるニ符フ合アせり。此宣旨ノリノミも大社オホヤシロ記キに見ミえタり。因幡イツハチ此

上宮ウヘノミヤとは即ツ上ノ不法ホフミナ美郡ミノ宇倍ウヘ神社ヤシロと出デせる社ヤシロ也ナリ。永万エマン記
小も上宮ウヘノミヤ也ナリ。今も稻葉イナハ郷宮キヤウミヤ下村シモムラ也ナリの所トコロ。宇倍ウヘ山ヤマと
云フ不レ在アりて。祭神マツリカミは建内宿禰タケノウチノスネ命ノミを申マウし傳ツタふ。こは人ヒト世ヨ也ナリ
也ナリ。後ノチ此神カミあまシと。幽世カミヨ小オホてはハ大社オホヤシロ此大神オホノカミ小從オホシひ給タマふ
也ナリ。此コトの如シ。皇七十六年ミカドノセツジュウジッロクニシツネ此所コトコロ云フを見ミるべし。はハ營ヤシロ
原ハラ孝標朝臣タカノサダノミコノミ此女コノメの更科ミタカノシカ日記ニヒギ。富士川フジノカハと云フは富士山フジノヤマよ
て落オツる水ミヅ也ナリ。其國コノクニ此人コノヒトの出イて語コトるやう。一年イツネンおろ物モノ小羅オホシ
わカ多ク也ナリ。甚暑イソヒヤク加カりしシらば。此水コノミヅ此コトら小休オホシみシて見ミれタ。
川上カハカミ此方コノカタよりシ。黄キなるニ流ナき來キて。物モノ不レ移シきて止トはるを
見ミは反故ホカノコト也ナリ。取上トリアりて見ミれば。黄キなるニ紙シ不レ丹ニして濃ツく

次條よ云ふを合せ考ふべし。○鐵胤云。此條前張まで既小板彫成せる時フも。參河國渥美郡羽田村。神明宮に神主。羽田野敬雄然して恒ツれ消息の扱いで小。一宮といふは。國司神拜。まゝ祭禮奉幣せらるる時ごとよ。最初めは事行ひし社れるるを考へ侍り。ちるは國內神名帳に。和泉。參河。駿河。伊豆。美濃。上野。若狹。紀伊。あど此國ク悉ク。第一小一宮を舉トれば。是也。尾張隱岐の二國は然らば。されど尾張熱田。如法院。本小は。熱田大神宮奉唱云く。坐有きは。熱田小て唱ふるよは。最初に讀上ヨミふる事と知られ侍り。當國猿投神社タガも社僧方を讀上る神事有りて。其時小隣人と稱ふも有り。まもし読何やま依時ト。其席よと退院ト。定めよて。可縁トて笠杖ト。

とを取具へおきて。嚴キあ。右は此消息ト。免懸トて。ぬ事トのよし聞傳トるは。是也。右は此消息ト。免懸トて。ぬを思ひ浮トび侍るは。取トりて。聞え參らば。と言ひ遣トされあるは。父の見て。おと能こそ思ひ得て有トり。此トに書ト加トし免よと云。るれば。かく附録とは爲トし。然トて因ト小國司神拜此事をも尚トう加トすむ。朝野群載ト。小國務條ト。事として。初任。國司の政務。此次第式あるが中ト。一神拜後。擇吉日時。初行。政事云く。一擇吉日。始行。交替政事。神拜之後。擇吉日。可始行之。云く。を。ある神拜は。ま。あ。ち。國。神。巡。拜。の。事。あり。是。よ。了ト前ト。そ。此。神。拜。の。式。を。見。え。縁トと。神。拜。之。後。云く。と。有トる。を。思トふ。國。司。を。任。國。小。到ト。了ト。は。國。神。巡。拜。を。恒。例。の。事。

形る故。書著さる。庶者ある。其て此式より前小太宰府官人加賀國司但馬國司あど初任の時下さる。庶宣の文を載る。何も三條於有りて。一神室勘文事右任代り。例可進上之。一可勤仕。例神事右國中政神事為先專致。如在之嚴奠。須期部内之豊稔云くと所見されむ。神拜を謂ゆる。恒例神事と云ふ。こもれる事を。是を以て玉勝間小。新任國司に應宣小。神事を先とす。庶事といふ條を立て。今引く文を出して。古も諸國小ても神事を重くせられしことを斯の如しを記され。まも國守神拜といふ條を立て。更科日記云く。東よを人さ。とて。神拜といふ事をして。國内を記し小云く。ちま菅原孝標の東國に國司小あてて。下わしが許よを。云い遣せ。も庶事あて。昔は國司任國小下ては。お於部内は神社神

社小詣でし事あてと著されも。あを國司神拜はさまは。よもをりく所見されむ。今昔物語。それ餘の諸書然のみを引出さあむ。

三十
○次了當所は鎮守神の方小向ひ。右は如く拜みて。此邑乎總守賜布。産土大神乃御前乎慎美敬比。夜守日守爾守里幸閑給閑止。畏美畏美毛遙爾拜美奉雷。

宇夫須那といふ語は正志く所見するは。尾張國風土記小。葉栗郡若栗郷。宇夫須那社。廬入姫誕生地也。故有此號と見え。そを神名式子。宇夫須那神社と出されも。此神學類編小。カ雄命ありと云ふ説あり。廬入姫の誕生より。社号を宇夫須那と稱せるもや。此姫を景行天皇の皇女なりと云へり。此然る説あがら。若くは御産に安うらむ事を祈りて。手カ男神の加は。石戸を開ふまひし事などを思ひて。此時こ

と更ニ祭リ給ヘ但シあは廬イ入リ比賣メ命ミコト比産土神ウケテウミ小コこそ有リ
 留ル小コも有リほほし。今云ふ産土ウケテ神カミを誰タレまれ其ノ生ナきル土地トコロの鎮守チンジュを申マ
 せ了レ其ノ生ナれし土地トコロを宇夫須那ウフスナをいす例レを推古天皇紀スシコ
 三十二年の所トコロ小蘇我馬子コソゴウマコが天皇小奏コソウせざる語コト了レ葛城縣カキ者ハ
 元臣モトウヂ之本居ノ也故レ因テ其ノ縣ノ爲ニ姓名ノとあり了レ諸書小生土産土ウケテウミあ
 とも書カキ效ナラひ。清和天皇紀キヨヘ貞觀六年十月の所トコロ了レ讚岐國サンシ提チ州シウ
 天川ウブ宇夫志奈神ウフシナカミ從五位下スツといふ事コトも所見ミ了レ然シれど此コ
 は何神ナニノカミと云イハこを詳サカあらはに。まま諸神記モロカミノキ八所御靈ヤツツミ條ジョウ了レト都ツ
 了レ文フミ子コ御靈ミコトの神カミ正一位マサヒト位イ記キ至マ天曆テンリキ延引ノボ了レ先マ以テ宣下ノボ被レ生ナ中ナカ頭カブ
 文フミ天慶諸神一階位記テンケイモロカミノヒトイ至マ天曆テンリキ延引ノボ了レ先マ以テ宣下ノボ被レ生ナ中ナカ頭カブ
 追オ可シ被レ進ノボ位イ記キ也ナリ祖父刑部大輔殿ソコノノ紫野今宮ムラサキノイマミヤ極位キョクイ宣下ノボ被レ生ナ中ナカ頭カブ
 申マ御沙汰ミコサタ今上イマノミヤ御靈ミコト社ヤシロ者ハ家君イヘノミヤ予カミ之本居ノ也追オ披ヒ例レ被レ生ナ中ナカ頭カブ

了レ神慮定カミノコト有リ擁護ウケゴ欽キと云イハ依事ヨリも見ミ也ナリ祖父ソコノノとは兼タテ豊宿トヨノク祢ネ字ナリ
 云イハ以テ家君イヘノミヤとは兼タテ照テ予カミは兼タテ敦ツあり本ホ子コ本居ノをウブスナ
 と訓ツ了レちて世ヨ小コを産土ウケテ神カミと氏神ウヂノカミを同じ事コト小思コトふ免メれど
 元ホよと差別サバある事コトあり了レそは産土ウケテ神カミと氏神ウヂノカミの敷キ坐マ以テ土ツチ
 地チ生ナ出デ依ヨリ諸人モロノヒトの産土ウケテ神カミある由ヨリ依ヨリ依ヨリ氏神ウヂノカミとは其ノ氏ウヂ
 人ヒト比祖神ヒヤカミをいふは更ニ改メ也ナリ其ノ氏ウヂの祖神ソコノノあら然シも殊ヘある由ヨリ
 緒ヨシあ依ヨリ也ナリ一家イツカ及びキ一族イツクまでも氏神ウヂノカミと稱ナせる古コ比例ヒレ了レ
 氏ウヂはも少シ内ウチと同言ドウゴンれるが其ノ一族イツクあ一郷イツキョウの内ウチ小コて親シく
 仕ツカ可シ祀ヒツる神カミの義ヨシあり然シれど内神ウチノカミといふも同ドウく氏子ウヂノミコは内
 子ミコと云イハふが如ごとく其ノ神カミの御内子ミウチノミコあ依ヨリ義ヨシ然シる氏ウヂと内ウチ清濁シヨウダク
 小疑コウギある依ヨリれど伊勢イセ内宮ウチノミヤの在アる地チま宇治ウヂといふも
 五十鈴川イツスズガハの川カハ内ウチある故レの名ナあるを宇遲ウヂと云イハよて知チべし

然れむ氏をうちと云ふも同じ族内ある義より出ると言
あり。そは陽成天皇元慶三年の紀に伊勢國度會郡大神宮
氏人神主姓荒木田三字大神宮氏人有三神主姓荒木田神
主根本神主度會神主是也。同五年紀に制令五畿七道諸
國諸神社祝部氏人本系帳三年一進ふと見えたる類に文
何まゝ有るが其文どもは氏人と云ふを多く内人といふ
と同じ様子聞え内人とは大御神の御内は親く仕奉る由
の稱あるをかの内臣内物部ふぢいふ稱の内も天皇の御
内小殊不親み給ふ由の稱ありと思ひ合サ。然れむ神名式小
伴氏神社伴林氏神社ふと何族類を胡亂ふき祖神なりと。
光仁天皇紀寶龜八年七月に所小内大臣從三位藤原朝臣
良繼病斂其氏神鹿嶋神正三位香取神正四位上と有る鹿
嶋社を武甕槌神香取社は經津主神小て藤原氏の祖神ふ
らば但し其相殿小天兒屋根命も坐せと此を後小河内國

平岡社よと移し坐する神あり。然る小中臣氏藤原氏小て。
平岡社を氏神と稱せ流事なり。鹿嶋香取字氏神と稱す所
は。中臣氏に遠祖よと志て。此兩社に殊な流故何して仕奉
る。その内人や在りし故あり。此由も古史傳に委く云るを
事ども。まゝ平野社は桓武天皇に御外祖ふち成祀れる社
あり。るを源平兩族に氏社と定免。梅宮を橘氏に氏神と定免
ふ流あや成思ふ。江家次第初年祭條に中院通秀公記
を引きて凡源氏神以平野為正也。於
八幡宮清和源氏義家以來事也と見え古記に壽永二年七
月傳聞平家公卿連署以日吉社為氏社云々。平野社用氏
社神慮可恐事欵と云ひ三代実録に梅宮祠者仁明天皇母
文德天皇祖母大后橘氏之神也。歷承和仁壽二代以為官祠
云々。考ふべし。此其祖神ふ流。まゝ祖神あらぬを云はば。

諸氏了氏神の祀を慇懃小行はし給事。仁明天皇紀。承和元年正月に所了。山城國葛野郡上林郷地方一町。賜伴宿禰等爲祭氏神處。まゝ二月の所了。小野氏神社在近江國滋賀郡。勅聽彼氏五位已上。每至春秋之祭。不待官符。永以往還。まゝ四年二月に所了。勅聽大春日布瑠粟田三氏五位已上。准小野氏春秋二祠時。不待官符。向在近江國滋賀郡氏神社。まゝの二祠の勅了。不待官符。と宣へる。氏神の祭祀を。はく清和天皇紀。貞觀十五年九月に所了。侍從從五位上。春澄朝臣高子。奉幣氏神。向伊勢國。賜稻一千五百束。以爲行旅之資。陽成天皇紀。元慶二年二月の所了。詔山城國正稅稻三

百束。賜從五位下。山背忌寸大海全子。以奉幣氏神。向阿波國也。と見え。此二條まゝ氏神の祭祀を重みし。以て類聚三代

格了。宇多院天皇に。寬平七年十二月に官符了。諸人氏神多。在畿内。毎年二月四月十一月。何廢先祖之常祀。若有申請

者。直下官宣。如此之類。往還有程。不得任意留連。經日遊蕩。と

も有る。我思ふに。氏神をいふ。先祖に限らぬこと。上も

し故。何廢先祖之常祀。とは宣へり。古道を志さむ人。た殊此官符の旨を思ふべき。然て此官符を拜はる。古く諸人。其神祭。たか。なら。二月四月十一月。行ふ例。亦了なり。其神宮雜例集。よ。二月中。申日。外宮。祓宜。氏神祭。祓宜。中。堪事。申。詔。乃。四月上。申日。中臣。氏神祭。官司。當社。神主。奉仕。之。祭。田。途。司。中。勤。之。饗。膳。無。使。之。時。同。司。中。勤。之。十一月上。申日。中臣。氏神祭。如。四月中。西日。外宮。祓宜。氏神祭。儀。式。同。二月。と有る。を思ひ合せて知らる。外宮。祓宜。の氏神。を。其。遠。祖。天

村雲命を祀り。内宮中臣は氏神を春日社と同く。鹿島借い
香取平岡の三社を祀ふよし。兩宮の書等に見えたり。借い
と上代^{カミツコ}は。國々此國造あや。其領る處^シ。祖神^{ミコ}を祭らるが
多うれば。其氏祖の神やうて産土神あるも多うてし故ふ。
世ふあうて氏神と産土神とを混^{ヒトツ}一^ツし思ふ事とありむ。
然^{シカ}は有き中昔れ書やも攷^シ閱^スを協ふ。産土神小對しては。
其地^ト小生^{ウマ}協^ク諸人々氏子を稱し。氏神小對しては。其を奉
ぶ。協諸人を氏人と稱せる趣あり。此差別を下^ミ引^ク。著聞
集あざれ文うて知べし。○按^ク者等云く。此頃師の稿本まか
神主藤井高尚ぬしの松廻落葉ちふ物を見れむ。氏神氏子
といふ事の考一條ありて。氏神といふ言の古證^コ上^レれ。成
和四年二月に勅語を引きて。此を祖神祭のいとく。重け
れむあると云れし。と云れしを然る事ふれど。氏子をば。氏の祖

子孫といふ事あり。但し日本後紀に大神宮小みてぐら
奉^ル給^ル久^ク氏^ノ子^ヲ親^ク王^ヲ乎^ヲ大神御杖代止言^ス定^ム奉^ル大神乃^チ大前^ノ尔
無^レれども。天照大御神の御子孫もあはし。おれ故^キ。氏子と
申せむ。氏の知れざる人ふても。其家の遠祖をば。氏神を云
べく。其人をば。氏子と云べきあり。是小依^ルて高尚抄ら^ク考^ス
る。小今世もあはる。れ里^ノくもて。地主は神を氏神と云ふ。初
も。その合せて。祖神なり。了祝ふとて。社^ヲ立^テ。春秋の祭
神とも祝へる。よあそ。又元^ノより有^ル於^テ地主の神は。社^ニ里
れ家^ノの祖神を合せ祭^リて。其神の社は。氏子といひ。しも
有^ルべし。かく云ひ効^ク。以て後^ノく。地主は神の事なり。里人の
以^テ然^ルる。うら^カ云^フ。氏神といふは。地主は神の事なり。里人の
心得^テ。事^ハ違^ハを出來^ル於^テ。あらむ。古^ノも。己^ノが家^ノに神と。地
主の神とは。共^ニ重^ク敬^ム。以て殊^ニ斎^ム。祭^ル習^ハあ^リ。と。師^ノ問^フ
必^ズさやうある。考^シと記^スされ^ル。此^ノ説^ハは。いうよと。師^ノ問^フ
申^セむ。其^ノ甚^ク誤^ル。説^ハ伊^ノ勢^ノ大^ノ御^ノ神^ノ。お^ノ賀^ノ茂^ノ六
神^ノ。御^ノ杖^ノ代^ノの^ノ内^ノ親^ノ王^ノ奉^ル給^ルふ^ル。時^ノの^ノ御^ノ詞^ノ。お^ノ必^ズその^ノ内^ノ親^ノ
玉^ノの^ノ御^ノ名^ノ。女^ノ御^ノ子^ノ。御^ノ名^ノ。仁^ノ明^ノ天^ノ皇^ノの^ノ御^ノ從^ノ妹^ノ。小^ノ坐^ノあり。

○玉ふあき五之巻

。四十

其七皇胤紹運録を見て知べし。三代実録仁安元年四月二
日の下。無品氏子、内親王兼淳和太上天皇第一女也。而
其然れむ氏神子對し云ふ。氏子の例と敬へくも非ざ。ま
其、於らく考す。りといゆ。説も去い言あり。此、主己が學ひ
の兄。亦て。歌文の事あざ。は。曉り得られし事ども有れと。
道れ。學問を其、棟。於ら。往し。とし己が許す。百。日。あ。ま。居
ら。ま。し。時。語。り。聞。え。し。説。や。も。本。於。き。て。云。れ。し。説。ども。
謂。や。る。道。れ。あ。る。べ。ま。く。松。廻。落。葉。あ。ど。小。許。多。記。さ。ま。さ。る。
を。其。帰。正。の。ち。ど。小。今。より。後。を。君。が。あ。く。ろ。の。種。成。る。を。於
於。道。れ。學。び。勤。て。む。と。終。ら。れ。し。言。れ。ある。を。違。す。と
の。事。あ。る。を。り。れ。ど。聞。訛。正。が。ち。小。て。篤。胤。が。名。を。出。さ。れ。終
は。己。が。恥。ふ。は。當。ら。ぬ。も。我。が。兄。れ。め。め。甚。く。心。ぐ。る。し
く。覺。也。故。事。を。多。く。以。て。眞。野。時。編。が。説。ふ。其。國。そ。れ。土。地。の。靈
る。と。語。ら。ま。き。は。て。眞。野。時。編。が。説。ふ。其。國。そ。れ。土。地。の。靈
れ。御。德。は。各。く。異。小。して。人。物。動。植。み。亦。其。神。氣。を。得。て。産。生
を。故。了。地。宜。方。物。各。く。そ。れ。性。を。異。小。に。産。土。神。は。これ。土
地。の。靈。ある。が。大。八。洲。了。各。自。の。國。魂。神。あ。り。一。國。小。を。國。魂

といひ、一處小は産土神と稱す。地勢方角小從ひて、其靈異
ある故了方隅不産の物あり。人まゝ容顔言語志氣の不同
あり。是み亦土地に神靈に寓す所ある故あり。漢書山書
よ。堅土之人剛。弱土之人柔。墟土之人大。沂土之人細。息土之
人美。坵土之人醜。と見え。周礼の地官司徒よ。以土會之法。辨
五地之物主。とて。生植の物。人倫。よ。至。ま。で。是。字。以。て。漢。土。小
其。異。ある。事。を。載。り。異。域。も。同。じ。理。あり。是。字。以。て。漢。土。小
も。人。生。小。て。其。土。小。依。て。姓。を。命。づ。る。を。本。土。小。報。也。故。謂。ふ
也。其。は。左。傳。隱。公。八。年。傳。小。因。生。以。賜。姓。昨。之。上。而。命。之。氏。
也。ある。是。あり。と。言。ふ。亦。亦。實。然。る。説。なり。其の時編が説ふ
小見えざるを。今を其繁を去り。文をも甚く引約めて記せ
るあり。世の諺了人の性質の事よ於きて。産土がらあど云
ふ。め。依。を。右。に。抑。神。れ。幽。冥。と。了。人。を。治。也。給。ふ。事。れ。本。を。上
説。よ。加。那。へ。り。抑。神。れ。幽。冥。と。了。人。を。治。也。給。ふ。事。れ。本。を。上

法條く小説する如く、神世小天照大御神、皇産靈大神の詔命よよきて、杵築大社に鎮座し大國主神の無窮小治給ふ御業ぬるよし、神典小委く傳きて著明あるを、猶それ古傳小本抄き、熟く推究めて考ふ所、大國主神は、幽冥の事、本を統領め給ふよし、あそ有れ、末く此事を、一國小國魂神、一宮此神あり。一處には産土神、氏神ありて、其神、ち此持分て司ふ刀、人民の世に在る間を、更小も云は、父、生、來、し前も、身、退、了て、後も、不、む、く、小治、給ふ、趣、あり、其、前、條、も、引、く、る、大、社、記、更、科、日、記、あ、ど、よ、見、え、と、る、事、の、趣、を、思、ふ、一、宮、の、神、等、巡、番、は、幽、事、を、あ、ら、し、給、ふ、如、く、思、え、れ、て、警、へ、を、お、し、現、世、の、上、小、大、君、お、は、し、坐、て、天、下、を、治、む、る、御、政、事、の、大、本、を、統、治、め、給、ひ、國、々、所、々、を、ば、そ、戎、別、ち、治、依、人、々、を、任、し、て、治、め

しめ給ふ有、趣、よ、い、や、能、く、似、て、を、思、え、る、ゆ、故、諸、越、も、土、地、神、ま、く、城、壇、廟、と、て、所、々、小、鎮、守、の、神、を、祭、る、と、聞、ゆ、る、が、同、し、趣、は、其、所、の、人、を、幸、と、ふ、事、に、彼、處、の、此、を、巨、細、了、説、は、書、等、了、往、く、見、ゆ、る、ま、も、思、ひ、合、さ、べ、し、此、を、巨、細、了、説、は、む、は、事、長、り、れ、む、此、小、治、中、世、よ、と、あ、ら、じ、れ、故、事、の、證、と、成、べ、き、を、一、二、抄、記、し、出、む、す、古、今、著、聞、集、神、祇、部、小、六、條、天、皇、此、仁、安、三、年、四、月、二、十、一、日、吉、田、祭、り、て、有、り、依、り、伊、豫、守、信、隆、朝、臣、その、氏、人、あ、が、ら、神、事、も、せ、て、仁、王、講、を、行、ひ、り、依、小、御、明、し、れ、火、障、子、も、え、著、て、其、夜、や、け、小、り、了、大、炊、御、門、室、町、あり、其、鄰、を、民、部、卿、光、忠、卿、の、家、あり、神、事、あり、有、り、れ、は、火、移、ら、ざ、り、め、恐、る、は、き、事、小、や、と、見、え、鹿、島、香、取、二、宮、を、藤、原、氏、の、氏、神、と、云、つ、こ、を、上、小、引、く、る、光、仁、天、皇、紀、に、見、え、て、古、き、事、あり、が、其、より、前、に、其、二、宮、を、奈、良、都、近、く、移、せ、る、が、春、日、社、に

是故春日社をも藤原氏の氏神と稱し。後長岡京の時、春日社を遠くとして大原野に移し、其後の平安比地、都を遷し給ひしうは、都近くとして山蔭中納言吉田社を勧請あり。是より以て藤原氏ある人々を吉田社の氏人とは云ふ。まゝ同部小藤原重澄若うして時小近衛尉に於らむとて、稻荷の氏子と有ぬがら、賀茂小仕奉りて、土屋を造進さるるなり。嚴重に成功ふて、社家推舉しられむ。外るべき様も無さるゆへ、度々の除目も漏りたり。式は山城、国紀伊郡に、稻荷神社三座とある御社にて、中座を宇迦之御魂命、左右を猿田彦神、大宮賣神ありと書せむ。小見えより賀茂社は同式に愛宕郡に賀茂別雷神社とあり。社あり。重澄此頃を當国に地主として、第一に等崇し給ふ御社あり。重澄社の師ある者小申し付て、除目に祈請させり。依間も、睡みある夢小、稻荷よと御使小参りて、依人あり。人出あひて是

をきく小、彼御使の申けるは、重澄が所望殊更に任せらるるを、うらむ。我が膝元にて生きたら、我を忘れある者あはと申けむ。申し次て大明神に申し入ゆ。由めて、度々御問答ありたり。然らば此度を任さまばとて、思ひ知せて、後此度の除目小成さる。後し、申られむ。御使歸りぬ。重澄を神小いみじき功立とゆふ。故に大神の神慮は、所望の任を得しめむとおぼゆ。此時、度々除目も漏りしは、稻荷神に、祈給ふ。故あり。然るに其事の此時、知られしむ。重澄が左右に望み申は、賀茂大神に、思ひ給ふ。告給ふとも無く、祈師の夢に、其事を知しめ給へる也。幽冥のちを、大抵かゝる物の有り。師おぼろびて、急ぎ重澄が許り行て、此由を語りて、奇む。と小、其夜に除目小は外れり。此夢の誠を知むが爲小。

稻荷子參りて。次の度此除目ふは。申しも出らば。されぬ。相違なく成されふり。と有る。稻荷神の御使に語り。重澄ら。我を忘きよりと有るを思へむ。稻荷社は。此人の産土神。小ませり。是を以て上。文子稻荷の氏子といふ。斯て此重澄。藤原氏あれむ。其氏神は。吉田社ある。云々言ふも更あり。氏神に對して。氏人と稱し。産土神に對して。氏子と稱する。こと。上り。糶る。信隆朝臣の。今川了俊に難太平記。故事と。合せ考へて。辨ふべし。ゆゑ。今川了俊に難太平記。其父。範國。赤坂に軍終。て後。駿河國を所領。給。て。入部。せ。依。時。ふ。富士淺間宮に參詣。せし。う。ば。神女。に。神託して。吾が氏子。欲。う。とし。故。了。赤坂の軍。此。時。ふ。我が告し。事は。知。れ。了。や。知。ま。り。や。や。宣。ふ。ふ。範國座を。退。きて。何。事。も。ら。覺。悟。し。侍。ら。ば。と。申。せ。む。笠。幟。の。事。を。按。せ。し。時。ふ。我が赤

鳥を賜ひし故。勝。こ。を。得。て。此。國。を。賜。ひ。ま。と。託。宣。し。給。ふ。ふ。範國。そ。此。時。思。ひ。合。せ。て。女。に。具。を。軍。は。忌。事。を。依。ふ。い。ろ。で。思。ひ。寄。り。む。誠。小。神。の。御。計。ひ。と。信。を。取。り。て。子。孫。も。必。ふ。の。赤。鳥。を。用。ひ。よ。と。言。ひ。し。よ。と。今。川。家。に。武。具。に。隨。一。と。せ。依。ふ。大。事。に。陳。ふ。は。度。ご。も。小。女。騎。何。了。了。俊。の。夢。も。人。に。夢。小。も。見。え。て。勝。利。何。了。し。と。見。え。あ。り。今。川。家。に。赤。鳥。の。事。を。武。家。に。名。高。き。事。あ。れ。ど。人。の。状。を。知。ら。ば。何。く。れ。と。誤。り。る。事。あ。る。が。此。を。櫛。の。形。を。あ。る。せ。依。物。あり。と。云。こ。も。な。伴。信。友。が。考。へ。し。る。説。あり。と。ぞ。其。此。等。に。事。を。も。を。赤。鳥。と。云。ふ。を。垢。取。の。義。も。や。有。ら。む。思。ひ。通。して。産。土。神。氏。神。と。此。其。氏。人。氏。子。を。持。分。け。て。治。免。給。ふ。趣。を。知。る。は。く。ゆ。ゑ。人。の。自。ら。思。ひ。得。り。め。と。思。ふ。

して献むるは依る事あるま中よかもし當所此神。不信の
かる法師も有り候を。甚瑣ちくこそ。もし當所此神。不信の
者の失を咎めて崇よおはし坐さは。何小憑み奉候とも他
所此神。さら小助け給ふ。ら。若餘社の崇よは。我が神
の惠よては宥め給はむ。此心をもて仕ふ。まき也と云るは
能く神此情状を窺ひ得る。説あり。實小此説此如く。素直
あ依心をもて。他道く。此意小率られ。神隨り。道小志し
て。一向小氏神。ま。産土神を信み奉て。在あむ。神の御
幸い無らめや。其は人々の心く小。此事は彼神小彼事を此
神小と定免。或を殊小信む。神有りて。殊更。祈を爲れ
も。然る事小は有れど。産土神を忘れて。彼重澄が。おきく。

其祈よ此叶ざる事有るを。己が氏神産土神小能く奉仕し
て祈願さむ小。若その神此預よ給ふ事あらは。他神とち
れ其事を知給ふ。物して。叶予給。道理ありと心得へし
然るを神と申せども。世よ有る事を。み。知り行ひ給ふ
物。非。各く。御徳を持分て。坐ませむ。互。助け合ひ給
ふ事と見え。より。其を何字も。知。あれば。雨を降し給ふ神
を。水。分。神。あるを。早。は。る。時。所。の。鎮。守。神。水。分。神。あ。ら。ぬ。神
等。祈りて。雨。を。賜。ふ。事。の。ある。は。其。鎮。守。神。と。ち。水。分。神。と
ち。小。物。して。雨。を。賜。は。し。給。ふ。あり。ま。く。此。水。分。神。と。ち。水。分。神。と
て。ミ。コ。モ。リ。此。神。と。唱。ふ。る。よ。で。脛。身。の。神。と。して。子。あ。ま。人
これ。を。祈。る。小。必。その。志。依。し。有。り。と。云。ふ。も。水。分。神。ま。其
事。な。志。る。神。よ。も。れ。して。子。を。賜。は。し。め。給。ふ。事。と。思。ふ。其
此。等。の。事。を。祈。へ。て。万。劫。の。祈。願。を。遂。し。給。ふ。も。必。然。依。へ
き。事。此。道。理。を。思。ふ。べ。し。ら。産。土。神。と。他。神。を。小。就。て。心。得。を。ま。き。事
を。思。ふ。べ。し。ら。産。土。神。と。他。神。を。小。就。て。心。得。を。ま。き。事
那。ま。ば。近。頃。此。事。あ。れ。を。記。し。そ。は。文。化。十。二。年。此。事。あ。る。り。

江戸に小石川戸崎町に石屋長左衛門と云ふ石工ありて。其弟子に丑之助といふ若者あり。重き瘡毒ありて。醫者らも愈はじき由を云しうば。元より酒客ありて有るが。讃岐國象頭山に神に禁酒の立願しりあり。然しも重き瘡毒の漸く小愈りて。然るに酒を何よても好物あまは。得禁じがて小時くは酒を布を號りて菜物にひふし。飲する事も有しとぞ。因に記す。彼象頭山と云ふも。彼山の別當金光院正傳に。秘書といふ物を鈴木隆彦といふ人は借りて見ある。元を琴平やいひて。大物主神を祭れしを佛書の金毘羅神と云ふ。形勢感應似たる故に混合して金毘羅と改めし。由を記せり。此に比叡山は太宮とて三輪の大物主神を祭りて在り。彼金毘羅神を混合せること。山家要略記に見えたるに似へる。然れども金光院に傳書も出雲大社大和三輪日吉太宮の祭神は同じと云り。あ

此後白峯に坐り。崇徳天皇の御霊を配祭せるよし。世人向ま移く云ふに。然も有る。其は其靈應ありし事。實どもを聞あはれ。考ふるに。崇徳院に御稜威あり。思ひ合さる。車の多うれ。幽にむ。と金毘羅の名を負給ふ。此御霊小や。然もは金毘羅と申。名こそ梵語あり。神實はいと。や。おと無き神に御坐せむ。畏み奉るべき事。こそ。俗に神道者修験者。あどの言に。金山彦命と云ふ。金宇よ。斯て其り。思ひ付する。杜撰して。さ。不。識。あ。ま。妄。説。あり。年。比。九。月。十。日。は。處。の。鎮。守。氷。川。明。神。の。祭。日。也。し。が。其。前。日。小。處。の。若。者。と。も。う。比。丑。之。助。と。云。は。和。主。を。狂。踊。を。上。手。取。ま。は。明。日。を。か。の。踊。を。せ。よ。と。言。ふ。丑。之。助。は。我。が。瘡。毒。を。愈。ま。じ。た。病。ありしを。金毘羅神に。禁酒の立願して。愈する。お。和。主。ら。も。知。れ。る。事。あり。醉。の。志。れ。心。あら。で。彼。踊。り。爲。ら。依。べ。き。う。と。辭。ふ。者。と。も。口。を。揃。て。明。日。は。

鎮守の祭禮あれむ。常とは異あり。酒を飲み踊りも爲ると
強ふる。丑之助がふも言ひて。當日を朝よて友どちを。
酒飲み遊び踊りて。酔狂れてぞ有り。依。因に記す。此氷川
明神と申す。此氷川
名式は。武藏国足立郡。氷川神社。名神。大月次。新嘗と云る
社の神を所く。小移し。祝ひ。多かる中の一社。て。氷
川神社は。祭神は。一宮。記す。素戔嗚尊等と見え。今も云ひ
傳ふる。ま。江戸砂子といふ物。此小石川あるも。其一宮を
勧請せる由見え。こり。此武藏国小氷川神社の坐。然る小巳
ま由を。古史傳す。委く云へれむ。此は説也。然る小巳
時は。あてよめ。忽小大熱らして。何らあぢや堪ふるや。金毘
羅さは。免させ給ふと云ふ。皆驚おて。如何と問へむ。庭
の空を指しして。人々小は見えざらん。あれ小御坐す物な
と云ふ。皆く見れむ。目うかくる物も無きは。如何ある御有

状おて。おはし坐と問ふ。丑之助火の如き息を扱きて。御
神を御黒髪長く垂れて。冠装束を免されて。雲れ上り立ぬ
了ひ。數多の御供扱き。從ひ。爪折の緋蓋を差りけ奉り。御前
小鬼神れおとき力士のて。其仰せ承は。汝が病きは
めて愈まじか。了しを。強小祈て申せる故。愈さしめ給ふ
所あり。然る小折くひそ。酒を飲する。ふ小有依。今日
は朝よめ思ふ。ま。酒を飲て。酔狂あ。ま。憎く思食に
小依。了て。手足の指。なみ。折しめ給ふ由。明り。言ひも果
然。早う。伏小ぬして。免し給へ。と。大汗を流して。泣叫ぶ
有さ。物。の。爲。おし。伏られて。其足の指。な。折。あ。状。りて。

恐ろしむと云ふも更あて然れども若き者ぞも心を勵ま
し諸共引起さむと立よはふ物了投らぬ如く覺え
ち倒されて近付こせ能をん。それ有状いと物まぢく恐し
けまむ。日頃は鬼をも挫きてむと競へる男ども皆逃れ
て慄き居りて。保元物語源平盛衰記あども平教盛の夢
狀を見ある文了源為義父子六人相具して先陳仕へ奉り
平忠正父子五人後陳よて數百騎の勢ありと見えたるが
清盛入道後物狂をしくありて謂ゆる火の病を煩ひて
死するまゝ太平記了足利がれ大將細川繁氏が宮方を攻
奉らむと筑紫了下る時小讚岐國はかて崇徳院の御
領を兵糧所不充しりて俄に病付て物狂ひ小成りる事
記して自口走りて我崇徳院の御領を落して軍勢は兵糧
所は充行ひし故に重病を受りて冷しき風は向すも盛
ある炎の如く凍ある水は飲めども漸返る湯の如くあら
熱や堪がとや是賊りて吳よと悲み叫びて關絶併地しけ

まげ看病の者ども近於らむと為るよ。何より四五間の中
を猛火は盛然ある様は熱しく更近付く人も無り
了云くと見えまゝ同記了羽黒山の雲景と云ひし山伏は
異人小伴をきて愛宕山の高峯に至り崇徳院の御堂を現
見奉れる小鎖西八郎為朝長八尺をりて人引矢
を執て従ひ奉り。と有るあと思ひ合され。最も畏く
ぞ所思斯て片足の指をみ折らると思ふ不孝小丑之助
由る。産土氷川御神入らせ給了を云て。おれ御罰を救は
せ給へや叫びりぬが。稍何しては。多久藏司稻荷來り給
るやと言て人小近寄こと勿れや制し給。起直り畏ま
す。志はし在りるが。腹這ふが庭小お了をいれ伏し神
等を送り奉る狀しけるが。物狂はし死狀を止り。爰小人
人うち寄りて其由を問了は。金毘羅神の怒り給へる御氣色

ま茂はも中々恐あ依御事あるが。雲に上り坐まして我が
方を流し目小一目見返り給ふごや。我をおし伏する加
此力士。己が足の指を一折し左の足は指をみ折
ふと思ふやぞ。鎮守神來り給ひ。まきも束帯小て供人
何り具し給子依が。因り記き尋常人。御神のちの適
アと云ふを異しみ思ふ者の有まじれど。謂ゆる有職の
事やぞ。学べる人の校意ある倫も。今の束帯などいふ冠服
を。人世とありても。甚く後子始まれる事。依を神世の神
とちの其をめし給へりと云こと。心得がし。於て云ふも
有べり。水ど是ま。上は論子依神位の階級など。如く現
世は。趣を用ひ給ふ神の御心あり。其は。雄略天皇の御世も。
葛城の一言主神現形よして。天皇と。其は。雄略天皇の御世も。
不。其御装束の。天皇は。かはり給ふこと。無り。其は。雄略天皇の御世も。
ふ。其。そは。一言主神。世と。雄略天皇の御世も。其時を思
千歳を経る。天皇と同じ御装束ありしは。其時の状を

用ひ給ふと見ゆるを。金毘羅神小向ひて宣子依を此奴い
思合せて辨ふ。多し。金毘羅神小向ひて宣子依を此奴い
よく好める酒を断ちて。其御前。祈白せる故。病を愈し
給子依事茂。忘れて。今日いよく酒飲。依を崇め給ふ。然
去とよ侍まど。元よ。我が氏子と志。殊小己が祭日ある
故。我を恥ぐさむる態。仕らむせて。人等。まき。けり。たま
て。酒を給する小侍。然れを免し給ふ。うも有むを。假令
崇め給はむ。も。我。一。わ。其。事。宣ひて。こそ。免も。か
くも。罰。免。給ふ。まき。態。あ。め。れ。然。る。事。も。恥。く。我。が。氏。子。を。思
召。れ。ま。く。に。御。罰。何。ら。せ。ら。依。く。事。あ。そ。心。得。は。べ。ら。絲。と。宣
ふ。ろ。ぞ。金。毘。羅。神。は。小。も。ぞ。思。召。せ。る。御。有。状。あ。ら。ぬ。何。の。い

ら子も無く。二神互にみ相ておはしり依所小傳通院
此多久藏主稻荷神來り給へ了。此を僧體の如く見え給ひ
淺黄の波頭巾を冠られ多。按ずるに此稻荷神のこと
吉祥寺は和田倉御門内は有し時より其地は鎮座ありし
分傳通院の中興。廓山上人の時了。学寮小極山和尚といふ
所化あり。元和四年四月はある夜。山主上人を始め。極山
和尚。同学は僧の夢。一僧見えて。入学せし事を思へむ。明
朝登山去べしと告り。然るに翌朝。極山の寮へ一僧來り
て。謁見あり。此事を山主に申せむ。夢は合せて不思議な事
事は思ひ入寺を許して。多久藏司とぞ名けり。然るに
小多久藏司の智徳他は勝水諸人等敬し。其後三箇
年の学席を経て。或夜の夢。小我は吉祥寺に住めり。稻荷神
あり。小社を作り給ひて。永く當山の守護神と成べしと
誨し。白狐の形を顕せし。見しは境内は鎮座を
よし。見えく。狐神を祭るといふ。狐を常人の稲荷と
名けて祭る故。よみ。其の既よ辨へり。き。備。此は狐神の
荷神。阿は狐。ふらむ。や。其を既よ辨へり。き。備。此は狐神の

僧躰ありしと云こや。いふや思ふ人も有はれど。伊
勢国に或。舞。き。男。老。狐。の。終。き。種。ぐ。は。事。と。も。語。り。け
る。よ。稻。荷。と。号。し。狐。神。と。も。俗。家。に。祭。れ。る。に。形。有。る。が。
寺に祭れるをみ。僧躰にて。各々。それ。主人の格位より
て。狐神の格位も。それ。事。と。云。は。る。御。二。方。は。間。小。平
よし。小。竹。真。掉。より。糸。で。聞。と。る。符。へ。也。御。二。方。は。間。小。平
伏して。甚く。恐。慎。め。る。状。を。申。は。や。う。は。已。を。傳。通。院。の。多
久藏主。小。を。修。了。金。毘。羅。宮。の。御。怒。め。氷。川。明。神。の。仰。せ。と。も
小。道。理。何。れ。て。承。は。了。候。か。く。承。了。候。も。元。古。や。執。が。怠。よ。也
事。起。り。て。侍。れ。む。左。も。右。も。毛。罰。め。給。ふ。ほ。き。を。此。奴。を。り
を。了。我。が。許。り。も。詣。で。來。て。身。上。の。事。を。祈。り。終。る。に。聞。し
もち。侍。れ。む。此。所。に。參。り。侍。了。い。り。て。御。雙。方。は。御。怒。め。は。我
小。給。ひ。て。是。奴。が。罪。を。免。し。給。へ。由。ら。は。我。ら。相。計。ら。ひ。金。毘

羅宮子カミミヤコは、おやぢを賽カヒラフし小參詣コサンギしめ奉らむと。慇懃マツリマツル小申さ
ましうむ。二柱神はそれミコ御心を和ナツし給へるさゆりて、互
小式代コシキダイして、伊豆イツイヅ豆マメく志マチワカく立別れ給ひ給と。大息オホイキおき振ヒひ
慄ワツれてぞ語コトりる。斯カて左サに足の指サユを、骨ハネうち折オられて疼イタ
れあり。人ヒトく始めよアリサこれ有趣アリサをよく見ミるは、まは恐怖オホコソ
るおオ限リなく、打ウちめて路用ロヨウ物モノども調トへて、丑ウシ之助ノスケを象
頭山カミヤマの御社ミヤ小參詣コサンギせしめける小彼折コカニとわし指サユも本ホの如
く愈ナホ了スしシ也ゾ。此コノ事コトをいぬし年トシ倉橋クラハシ何某ナニニ終ハて來キて。語コトら
堀家ウラベ政富サシチミが江戸エドよ來キて在アる所は、おオ高橋タカハシ玄門ゲンモン齋サイといふ人ヒトも聞キくも、小問コトしめ、其ソノ後ノチまアる所は、彼カニ町チヨウ辺ヘ
り違チガふこと無ナれむ。此コノよ著シせるあり。は、是コノよアる所は、前マヘ小難コナシ

波ハある松村マツムラ完平カンヘイ。わが許ホト小在コる時の物語モノガタリ小。其ソノ邑チヨウ不コト聲コエい
せ善ヨクくて。今イマ様の長唄ナガウタを謡ウタひて業ノセをシる男オトコ何ナニだ。或シ日も
女メへ行く途ミチゆて。山伏體ヤマブシタマある男オトコ何ナニへアる。行違ユキチガひ所から、其ソノ方カタ
の聲コエれ美メとシて、我ワレよ志マシはし貸カシてよと云イふ。道行ミチユキぶかの戲シ
言コトと思オモひて。唯タカを云イはく笑ウツひ過スる。三日サンニチはうアる所に有アりて。
病ヤむ事コトもあリた。小聲コエりて出デ出デ。さアまアと彼カニ異人イニよ聲コエを貸カシ
る事コト小心コソウシン扱アりて。住吉神社スミヤカミヤを産土ウツチ神カミあれむ。祈イノり白シさむと
出行イデる途ミチゆて。加カは山伏體ヤマブシタマある人ヒト來キて逢アて。先マツころ我ワレが
請コトへる如カドく。聲コエを貸カシあがら。そ我ワレ忘ワスれて。産土ウツチ神カミよ申マシ祈イノら
むを爲ス依イこそ心得ココロエ絲イト。汝ナニ加カしあアる所に祈イノらば。必カナラしシを罪ツミし給タマ

はむ。然る小於ては。我ま。汝う。から。死目を見せむ物ぞ。然らざる。今。志。ば。し。此。間。あ。ま。ば。お。げ。て。貸。ま。子。と。云。ふ。よ。始めて。先。聲。を。借。ら。む。と。云。ひ。し。時。小。唯。し。扱。る。事。を。思。ひ。出。し。て。俄。小。恐。ろ。しく。成。り。て。産。土。神。を。祈。る。事。は。や。め。む。と。堅。く。約。り。て。途。よ。り。立。歸。り。り。也。此。後。三。十。日。を。り。有。り。て。物。を。行。く。途。よ。り。ば。彼。異。人。の。行。逢。り。依。小。其。方。此。聲。は。今。返。ま。げ。し。と。云。ふ。よ。ば。や。本。此。聲。小。あり。ぬ。斯。て。異。人。此。の。報。を。爲。べ。し。と。て。禁。厭。の。術。を。授。け。る。が。方。此。の。病。小。驗。あ。り。て。後。小。は。唄。を。う。ふ。業。成。止。め。て。禁。厭。此。み。志。て。世。を。安。く。送。り。し。と。言。ひ。按。ふ。う。色。を。借。ら。れ。り。と。云。ふ。也。疑。ふ。人。も。有。べ。り。ま。と。呼。く。は。彼。連。哥。小。名。高。き。山。崎。宗。鑑。と。云。し。

能書の異人。教日手を借られて。其間その書こと能く。ま。と。近。く。上。總。國。東。金。と。い。ふ。處。の。孫。兵。衛。と。云。し。者。異。人。子。耳。と。口。を。借。ら。れ。て。三。年。が。不。々。耳。を。い。づ。れ。も。在。し。事。の。ど。ま。藤。原。守。信。の。耳。囊。と。名。が。り。し。書。小。小。川。向。邊。の。武。家。此。右。筆。を。勤。め。し。人。異。人。子。手。を。借。ら。れ。て。是。も。二。三。日。が。不。と。無。筆。あり。て。一。字。も。書。得。ざ。り。し。事。あり。此。を。共。よ。い。せ。近。頃。の。事。形。を。委。く。は。仙。傳。今。井。秀。文。が。或。侯。の。語。境。異。聞。に。附。録。せ。る。を。見。る。べ。し。は。い。今。井。秀。文。が。或。侯。の。語。り。給。り。依。を。承。り。て。語。れ。依。を。其。侯。の。治。給。ふ。所。に。或。童子。異。人。小。誘。は。れ。て。行。方。志。を。以。て。成。ぬ。る。を。兩。親。い。ふ。く。泣。歎。き。て。産。土。神。を。祈。り。依。小。四。五。日。を。り。て。歸。り。來。て。語。り。る。は。伴。は。ま。し。處。を。何。所。と。も。知。ら。ぬ。山。あ。る。が。山。伏。體。に。依。異。人。お。不。く。居。て。劍。術。を。習。ひ。て。在。し。う。折。く。酒。を。飲。か。は。ま。事。も。有。り。て。然。る。事。ど。も。小。役。は。れ。ぬ。の。昨。日。此。言。小。汝。が。親。

せも切願へばせ。産土神れせく汝を返し遣れと仰せ
有れを。留^ト給^トぐあしとて。送^タ返^サされけと語^セ言^ハひ。彼
備後國あ^レ依^ル。稻生平太郎せいひし者の許^キ来^ルる山本何
某と名告^ルる妖物^トと。平太郎が應對^セ依^ル時^ニふ。その産土神。
身^ミ小^コ副^ソひて護^ゴ己^ニ給^フへる故^ニ。平太郎それ妖氣を受^ケけし
事^{コト}あ^レを思^フふ^レ。此^ニ平太郎が物怪^ニ逢^ヒる始^メ末^ニ。其^ノ談
本^ノ有^ルる字^ヲ集^メて己^ガ校^合せ^ル。稻生物怪録と云^フ物^ノ數
此^ヲ思^フふ旨^ヲ有^リて。序^ノ字^モ附^シり。披^キ見^ルべし。神^ノ産
土^ノ神^ノ氏^子を惠^ミ給^ヘる事^実も多^ク聞^持し^ルべし。此^ノ如^ク
不^ハ所^ニ狹^キわ^ガる^レ。然^レのみ多^クは記^シ出^カふ^レ。如^ク
思^ヒ切^クと依^ル小^コ妖物^ノ人^ノ小^コ於^キて禍^ハ害^ヲを^ル事^ハ有^レ。
某^ノれ産土神^ノとち^ニ專^ラと掌^ニ守^リ護^リ逐^ニ退^スる^レ乃^チ御事^{あり}。

然^レばとて。其^ノ神^ヲを常^ニ小^コ信^仰も奉^ラら^レら^レむ者^ハ。あ^ノの^レ於^テ
ら御^ミ守^リ護^リも厚^クから^レ怒^リ趣^{あり}。此^ノ心^ハは^レ戸^ヲを^熟く思^フふ^レべき事
あり。己^ノあ^ノの^レ説^ヲ述^ベて。往^キ年^ノが^レ詐^シ居^テし^レ。寅^吉と云^フ
る小^コ答^りら^レく。誠^ニ言^フふ^レ如^ク。山^ノみ^テも其^ノ事^ヲを^きて待^テ
妖^ノ魅^ヲを^まれ^何う^もま^産土^ノ神^ノの^あ於^テく^守り^給ふ^人は^福
事^ヲを^あま^{こと}能^ハは^産土^ノ神^レ守^リ護^ルま^間は^伺ひ^て誘^ひ
る^も親^レの^丹誠^ヲあ^らし^て祈^ル時^ニ返^シては^其界^ノ事^ヲを^世に^漏ま^じ
ぬ^事と^ぞ然^レれ^ど時^ニより^ては^其界^ノ事^ヲを^世に^漏ま^じ
た^為す^人に^如く^あし^て返^シす^事も^多う^也。神^ノの^御力^ヲも
然^レる^事も^まて^を制^シ給^フ難^キ事^も有^リ。や^まと^何う^丹誠^ヲ
あ^らし^て祈^ルれ^ども^帰ら^ぬ人^もあ^る。元^よと^然る^へき^由
有り^て神^トち^相議^リて^使は^しめ^給ふ^事も^あり^と聞^ゆれ
た^所で^野山^種麻^呂が^子の^レ。ち^々上^リ引^多し^難太平^記
多^四郎^が事^ヲを^思ひ^合は^べし^{。ち}々^上引^多し^難太平^記
乃^チ依^ル富士^淺間^神れ^神語^小。今^川。範^國を^我が^氏子^小欲^り。

し故云くや宣子伝を思ふ。神も御心す叶へる人をは
他處ある成も。其氏子小せま欲しと思召に趣あり。然れを
何れの神れ氏子小はれ。其産土神小いを愛く思を奉る
ばく仕奉る。其餘の神等もも憎まれ奉るはく。其行ひ
を正しくに居き事云ふも更あらず。今川、範圍より八代かやど
勢ある大名ありし。其八代の孫ある義元といひ。人猛
威不遇て戰場に死し。其子氏貞と云ひし人の時、滅びし
とき、此を餘り小勢を振ひて、民を育むべき大名の職を
れりし。故に、富士淺間、神の守り給え給て、彼赤鳥の笠帳
もあつし。無く、遂に國をも失ひてぞ有り。但し、去る其
の見えざる。今川氏の事小就て云へど、實は國に大
名さち此多く亡びありしも、皆幽然るはき。此より有
む。凡人も其産土神まへて深く思ひ。今しも大名さち更
因循して能く信仰まへべき事小こそ。大抵世人れ其本居

此地を放れて他所小住むこと。今は現小種く此由縁有めれ
と。其は人事よあそ有れ。幽るを産土神す忠あらで所を逐
はる。や。其移れる處の鎮守神と。本居れ神と神議まして
物し給ふとれ。二を出だ。然まは本生れたる處を放きて。他
處小移りて住む人たま。其本居の神を拜し。次小今住する
處の神を拜まほし。其本居を放れて。他郷に移ること。人の
此御心あること。彼、範圍の思ひ寄ありし事。實は富士
淺間、神れ御心ありし。思ひ合せて辨ふべし。○後、攝經
亮の梅窓筆記を見れ。山城の賀茂下上の社を、一宮りて
地主あり。祭、小も國祭あり。其故より。昔を宅替あども。
よ。於此、社を申せし事。や。梁塵秘抄口傳集十一卷。仁安
四年二月七八日ごろ。大雪降りて。日里をり。白
賀茂社へ参り。祀と有。何と云ふ。能も見出し事。あ
賀茂社の氏子。限り。何神の氏子。て。古の正しき道

を行らむ人を宅替所替ふと申す。其の地主は神子
暇申して其地に住らむ隙の厚き由をも謝してぞ徒り不
らむ。是れ就て思ひ出さる。我が弟子ある亀井忠篤を
江戸の湯島に住みて孝行の事ども公儀に聞えて御褒美
をも賜はせし徳行の者ある。これが妻を越後國頸城郡高
森村に産あるが。国を出る時の夢にその産婦誦訪明神の
御形を見え給と離らう。我が氏子菊女を御許へ参らせ
宜しく計らひ賜は給と宣ふ。己の家は屋根より高く、実
上は菅原天神おとし坐てふし。かみ預り給ふよし。御答
ありしと見て覺る。江戸に來て聞もあく。湯島天神の
氏子小嫁し來れ依を奇しき事と。嫁きて後子語れりと忠
篤云へり。己を實はらる事と思ひ合さぬ。物あら。此をは
てむ。何と云らむ。我が本生は國出羽の秋田に民の俗小
子を生て産土神に參詣せしむる事は。何所も同じ趣あり
が。旅立ち候了。必産土神に參詣て歸て來むまでの事を
祈願して神主より旅中の守符をうけ。加於其社地は清

泥土砂を少はうと賜をめて。其を生土と云ふを紙に包み
て懐中小納め。何事小依らば快あらぬ事あれむ。其土は少
く嘗る。決えて旅中は災難な事と心得し。依が多か
諸國此事をも尋ぬる。薩人を始め。然る國所も多しと
聞ゆ。依は疑なく古風の遺れる所也。其生土を旅中にて用
酔ふ時。まゝを水あさり。此病ある。其外にも心已る時。こ
いり。水は糸をに入れて飲むあり。然して旅より歸り
て後。其餘れる生土を御社の本の所へ返し納めて。實し
を申し事あり。まゝ。常に産土神に守符を身を放たまじき
物ぞと云ふ。とは。祖父母より父母より。新拾遺集神祇部
の訓れし事を。今も多し。小覚えあり。新拾遺集神祇部
藤原雅朝は歌小。阿豆とも宅寢ても覺て毛頼むる。愚
依身を神小任せて。法印源深の歌小。後世も此世も神小

任まらぬや。愚ある身の頼りなむ。と有は二首共ういせ感
ふれ中ナカも。源深タカは歌は。法師とも有らぬ口於きふて。殊コトう
珍メダカらじ。世人いうて由ヨなき佛意をやめて。此歌あどの意ココロを
深フカく思はむ由ヨもか。然シカるを誠マコトみ此哥の如く。此世を更マな
をば。産ウま神を申ウまも更マあり。神カミうちみなき幸サイハシひ坐イして。其ソノ時
る所を定め給タマふ事コトも取トむ。其ソノ近頃チカキの事コトあれど。思オモひ合アひ
協キョウの事コトありて。書カキ留トむる勝カチ五郎ゴロウ再生サウジ紀聞キブンと云イふ物モノは。和漢
の故コト事コトを見得ミるは。少コく附録ツクリと云イふし。評論ヒョウロンせるを見ミて知チる
し。ま。此コノう就ツキて按オふ。無住ムジュ法師ホウシが砂石サシ集ツ小コ。三井サン寺ジは公
顯僧ケンソウ正マサは。顯密ケンミツは學ガク匠シユウめて。道心ダウシンある人と聞キえられむ。高野
は明遍メイヘン僧都ソウト。その行業ケウギョウを床トコしく思オモひ。善阿彌陀佛ゼンアミダブツと云イふ道
世者を語カタらひて。其ソノ様サマを見ミせられ。善阿ゼンア加カの坊ボウ小コ行コウて

申ウ入レるれむ。呼ヨ入イきて夜ヨまから物語モノガタリしり。此コノ公顯コウケン僧正ソウジと
河の上カハノウヘ皇ミコは御外ミソト威イりて。上皇ジョウコウは灌頂カンテイといふ事コトを。斯カて其ソノ朝
授ウケけ申ウせる人ヒトは。源平ゲンヘイ盛衰セイサイ記キを見ミえり。斯カて其ソノ朝
淨衣ジョウイを著キし幣ヘイをもちて。一間イツカンある。帳トビのけある所トコロ小コ向カウひて
所作ソサを協キョウを。善阿思ゼンアシを。の作法ソサハシう。此コノと見ミる。三日サンニチがやと
替カへること無し。事コトは體テイをよく見て。其ソノ由ヨを問トへは。進スみても
申ウく侍ハヒる。小コ問ト給タマふ。協キョウこそ本意ホンイあれ。都ミヤコの中ナカは大小ダイコウの神
祇キは申ウまら及およばず。邊地ヘンチ邊國ヘンクニまでも。聞キ及およぶ。隨ツひて。日本
國中クニナカの。大小ダイコウは諸神シヨカミの御名ミナをかた奉ホウりて。此コノ一間イツカンある所トコロ小
請コトし置奉オキホウりて。心經シンキョウ神呪シノクあど誦ズして。出離シュツリ生死シニシの要道ヨウダウを祈
て申ウれ。外ソト別ベツの行業ケウギョウなり。我が國ウラは神國シノクニと云イふ。我等ワレラみ

彼孫裔あり。氣を同くする因縁淺うらば。此外の本尊を尋
ねて還りて感應るべくして思へし。仍てかくれ如く之行儀。
異様あれども。年久しく志おけ侍ると語らる。善阿知くて。
誠了尊き御意樂ありて。歸りて僧都小申りまは。
智者のまは。おろろれ行業阿らじを思ふは。合せて。いみ
じく思慮られぬとて。隨喜の涙を流されり。青は藍よ
り出て藍より青なり。如く。佛より出て佛より尊なり。神
明の利益は色あり。心有らむ人も。彼僧正の迹を學び給ふ
は。しと言ふ。此を文を甚く終めて引く。れを。委く。本書を
神道佛法無二の説を立する事を論じて。此事を引き。公顯
者易佛。而會神者乎。兼俱。業者。易神。而會佛者乎。有意之人。三

復余言と云れしを。共小情ある法師等なり。然は有れ
信了然る言あり。ど。神は佛に優れる御徳をば。斯むうと知れども。あや佛者
ゆて終まは。往昔いまど佛教の學も我等が如くは精の
らで。其もて囉々佛經ども。多くは後世に偽作なり。しも
得知らる。佛祖が眞説を聞ゆ。佛も。天皇祖神の神語に反
る邪説ある事をし。得しも辨へらるが故あり。僧のちれ佛
學をし。我等の如く精のららばと云ふ。いとき大言のごと
思ふ。倫も有れど。余が印度藏志を見む。其疑を晴あまし。
其は無住法師が。心有らむ人も。公顯僧正の迹を學び給ふ
と云。佛に然る説あり。荀子ある出藍は譬をひきて。神を
佛より出るは。垂迹としも説とあり。法師は常の心あれど。

實ニ小は國土人民万物草木を更ふ也。釋迦も祖師らも。悉皆
神の垂迹ニみて。神を万社の本地ニとしを知らず。依を憐ニむべき
事ニよクそ。抑佛を本地。神子垂迹と云ふ説も。羅山先生の語
其異端以離我而難立故。設左道之説。曰。日神者
大日也。或其本地佛而垂迹神也。時之王公大人信伏不悟。遂
至令神社佛寺混雜而不疑。讀書知理之人。可少覺也。非為庸
人言也。云々と云れし。如し。此事
はあち巫学談弊ニ説くを見べし。然るを法師らは更ふ
也。世に庸人らも。佛を本地。神子垂迹ト見と常言ト云ふと。
まし此言の如くは。天地に造化を佛の心儘ニ成べき。天
神地祇に造化をし禁ず。依こそ能はば。佛祖それ身を始め。
人身を造化の神に隨意ニ造らシめて。万物に男女トあらシ志
免ト謂也。依魔梵語。具云。魔羅云々トある。惡物を各々ニ小ト扱ル

て姪情トあらシ免。其物もト修道を害スひ。惡道ニ墮せしむ
依を何事ぞ。佛祖もそれ一物トあらシ事は。妻を三人もちて。
子をも三人生せふト論ハ無し。人小彼一物あ依カ故
小姪欲心の有ルるを。其我神の産靈トはみく造シめて。僧
道ニ不姪ト戒を立テるは。深井を掘リて。水の出依を憎ムむ
よ等シき頑愚小非トや。此一劫ト以ても。神を天地万物の本
地ト依事を辨シはシ。此トいともト雜シ論トあらシども。世に痴
人トらシ小示スと。古今妖魅考ト記スせ
し。因ニよクいテり。其端を記ス。儲トそれ本地垂迹の説こそ
惡クれ。上件トに法師トあらシ。神の御徳をト淡ク仰ミきて。其心得を
書キも記シ遺シ依トを。甚愛スき人トらシ。其ト反ルる醜シ法

師は殊小多うア。其は神階編小。僧どもは太神宮を始え諸社に詣らる。神を拜みそと。制禁百端ある由成記して。剩小文何アて云く。一瞻一禮諸神祇。正受蛇身。五百度。現世福報更不來。後生必墮三惡道と。おれ衆人の信を奪ひ。加於伊勢内侍所など。小忌詞何アて。佛事を避け。僧尼を忌むとを憤る心よア。其臭成蔽はむ。その術計あり。慎みて彼術中小淪胥。その事あり。れや。言は。信小尤。ゆる。誨し言あり。俗人。一代の守本等とて。子も千手。丑寅の年。虚空藏。卯戌。亥。辰。巳。巳。普賢。よ。午。勢。至。未。申。年。大。日。よ。酉。人。不。動。子。戌。亥。八。幡。那。と。云。へ。る。類。を。法。師。の。人。を。誑。う。せ。る。説。了。て。耳。は。め。れ。聽。さ。る。ぞ。汚。は。し。き。其。産。ち。神。氏。神。こ。そ。人。と。一。世。の。守。護。神。了。は。坐。ま。に。あ。ま。

伊吹酒屋先生及門人著述刻成書目 塾藏版

- 古史成文 神代部 三卷 ○古史徵首卷 開題記四冊 神代系圖一冊 凡五卷
- 古史徵 神代部 六卷 ○古史傳 白至八 二帙
- 神代系圖 折本箱入 一帖 ○同 懷中小折本 一帖 ○同 挂軸 一帙
- 每朝神拜詞記 訂正再刻 折本 一帖 ○玉多須喜 一巻
- 靈能貞柱 二巻 ○入學問答 一巻 ○太元圖說 石搦 一帙
- 弘仁歷運記考 二巻 ○万聲大統譜 一幅 ○古道學神号 石搦 一幅
- 天津祝詞考 一巻 ○德行式 石搦 一枚 ○立言文 石搦 一枚
- 神字日文傳 二巻 ○疑字篇 日文傳附録 一巻 ○皇國度制考 二巻
- 古道大意 講本 二巻 ○靜乃岩屋 講本 二巻 ○醫宗仲景考 一巻

○皇典文彙 三卷 ○祝詞正訓 二卷 ○古史本辭經刻在四卷

○古今妖魅考全五卷之内 三卷 ○大祓詞正訓附天津祝詞祝詞文例 一帖

○牛頭天王曆神辨 一卷 ○赤縣歷代尺図 一枚 ○木匠祖神号 一幅

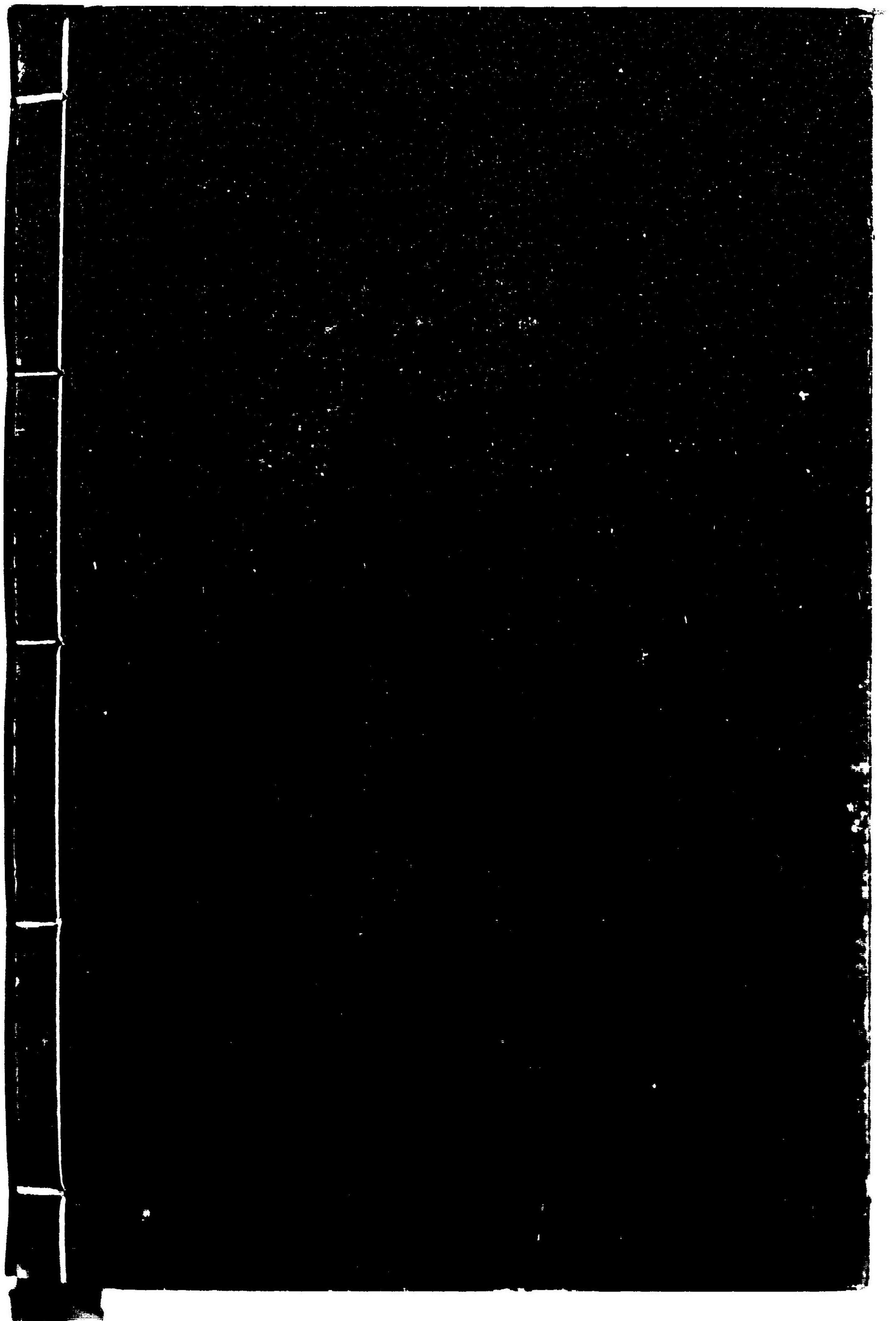
○童蒙入學門 一卷 ○神德略述頌 一卷 ○古道訓蒙頌 一卷

○宮比神御傳記附右指御仲影 一卷 ○天滿宮御傳記畧繪入 二卷

○日女嶋考 一卷 ○古學二千文 一卷 ○草木撰種錄 一枚

○出定笑語附錄 三卷 ○悟道辨 二卷 ○伊吹於呂志 二卷

先生の著書都て百部巻數千巻に近く、既小刻成の物右に如し、但し百部
之内、下孫外のみ傳遺さぬ、物廿五部、假に名けり、内書と云、同門篤志比
者、一覽を許されざる小非を、其も師家小就て問べし、其餘は十五部、
假に外書と名け、此を次く上木して、同志に示、金し、右内外の全書目、
於其書等、大意を知むと思、む人は、別不記せ、著述書目集と云もの
一卷、而、就て見べし。
門人 生田因秀 河内盛征等記



837
10
86

墨
子

卷
一

曹山文庫